

# 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

—平成11年度—

平成12年3月

東 大 阪 市 教 育 委 員 会



## はしがき

東大阪市には、地下深くに先人の残した貴重な文化遺産－遺跡が数多く眠っています。本市では、これら遺跡・埋蔵文化財の保護・顕彰の観点から、大阪府下では早い時期に、文化財課や郷土博物館を設置するなど、広く市民の方に文化財の活用と普及に努めてまいりました。

また、平成11年度より、個人・小規模事業主を対象に、遺跡内での共同住宅等建築工事に伴う発掘調査経費の一部を公費負担する制度を、国(文化庁)・大阪府教育委員会のご協力を得て実施しております。今回報告します遺跡の調査概要には、上記の公費負担による調査も含まれております。調査成果は次章以下に記すとおりで、次世代に引き継ぐべき遺構・遺物が数多く発見されました。本書が埋蔵文化財保護行政の実績報告としてだけでなく、地域の歴史を掘り起こす冊子として広く読まれることを望みます。

平成12年3月

東大阪市教育委員会

# 目 次

## はしがき

## 目次・例言

第1章 平成11年度国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査・試掘調査の概要	1
第2章 船山遺跡第4次発掘調査	3
第3章 小若江遺跡第4次発掘調査	11
第4章 瓜生堂遺跡第48次発掘調査	27
第5章 若江遺跡第76次発掘調査	37
第6章 意岐部遺跡第4次発掘調査	51
第7章 西ノ辻遺跡第41次発掘調査	65
第8章 大坂古墳第2次発掘調査	77

# 例 言

- 本書は、国庫補助50%・市負担50%（総額10,000,000円）で実施した、個人住宅及び個人・小規模事業主による賃貸共同住宅の建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
  - 調査は、調査原因にかかる個人・小規模事業主の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
  - 現地の土色及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（1998年版）に準拠し、記号表示も同書に従った。
  - 調査の実施・進行にあたり、下記の方々からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である（敬称略・順不同）。
- 藤本 博司・武村 泰太郎・石田 順一・奥野 明・額田 見作・樽井 敬太郎・  
奥林 昭二・杉原 賢一・山崎 行庸・松本 恭徳

## 第1章 平成11年度国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査・試掘調査の概要

国庫補助事業による埋蔵文化財の緊急発掘調査は、東大阪市に文化財課が発足して以来久しく実施してきたところであったが、このたび開発工事を行う個人・零細事業主が負担する発掘調査経費の一部を軽減する観点から、国庫補助事業の対象となる発掘調査の範囲を拡大した。即ち、

① 個人または零細事業主が行う賃貸用共同住宅の建設工事

② 調査面積が300m<sup>2</sup>以内の工事(ただし、このうち補助の対象は200m<sup>2</sup>)

の2条件を満たす工事について、国庫補助事業の対象とした。また、発掘調査の前段として、個人住宅建設工事・開発工事が埋蔵文化財に影響を及ぼすか否かを確認する試掘調査についても、前項の個人・零細事業主に限り、国庫補助事業として実施するところとなった。これらに加えて、従前より補助の対象としている個人住宅建設に伴う発掘調査を併せてると、別表のとおりとなる。

平成12年2月末現在

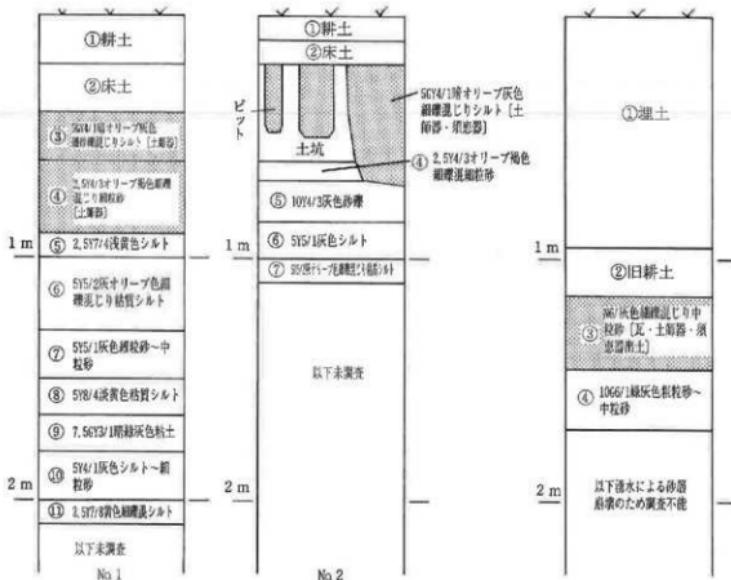
調査事業名 及び調査原因	調査事業名 及び調査原因	担当	調査期間	調査 面積	備考
船山遺跡第4次調査 (個人専用住宅)	六万寺町3丁目599-1	菅原	11年5月6日～ 5月10日	33m <sup>2</sup>	本書第2章
小若江遺跡第4次調査 (賃貸共同住宅)	小若江3丁目334-1,3	菅原	11年8月10日～ 8月23日	82m <sup>2</sup>	本書第3章
若江遺跡試掘調査 (賃貸共同住宅)	若江南町1丁目664-1	若松	11年8月4日	45m <sup>2</sup>	本書第5章 に併載
若江遺跡第76次調査 (賃貸共同住宅)	若江南町1丁目664-1	下村	11年9月7日～ 9月30日	120m <sup>2</sup>	本書第5章
瓜生堂遺跡第48次調査 (賃貸共同住宅貯蔵)	若江北町1丁目38-3,6	菅原	11年10月18日～ 10月21日	46m <sup>2</sup>	本書第4章
意岐部遺跡第4次調査 (賃貸共同住宅)	御厨東2丁目681-4	下村	11年10月25日～ 12月9日	250m <sup>2</sup>	本書第6章
西ノ辻遺跡第41次調査 (賃貸共同住宅)	南莊町507-1,2	若松	11年11月2日～ 11月25日	150m <sup>2</sup>	本書第7章
山畑古墳群試掘調査 (賃貸共同住宅)	客坊町982	芋本	11年11月4日	27m <sup>2</sup>	来年度に報 告予定
神並遺跡試掘調査 (賃貸共同住宅)	西石切町1丁目781	勝田	11年11月8日	12m <sup>2</sup>	本章に概略 を報告
稻葉遺跡試掘調査 (個人専用住宅)	稻葉2丁目145-1	勝田	11年11月29日	6m <sup>2</sup>	本章に概略 を報告
大藪古墳群確認調査 (個人専用住宅)	東石切町5丁目559	若松	11年12月13日～ 12月28日	94m <sup>2</sup>	本書第8章
山畑古墳群発掘調査 (賃貸共同住宅浄化槽)	客坊町982	下村	12年1月11日～ 1月15日	34m <sup>2</sup>	来年度に 報告予定
小若江遺跡第5次調査 (賃貸共同住宅)	小若江3丁目313-20	下村	12年1月31日～ 2月1日	12m <sup>2</sup>	タ

このうち、神並遺跡試掘調査・稻葉遺跡試掘調査について、その概略を以下報告する。

東大阪市西石切町1丁目781、782、783、786番地において、賃貸共同住宅の建設を予定している個人から、東大阪市教育委員会宛、土木工事施工届及び埋蔵文化財発掘の届出が提出された。申請地は、周知の神並遺跡内にあたる。神並遺跡は、绳文時代早期から室町時代にかけての集落跡で、特に縄文

時代早期の遺構・遺物は近畿地方で数少ない例として注目を集めている。東大阪市教育委員会では、埋蔵文化財への影響が考えられるため、工事に先だって試掘調査が必要な旨通知した。届出者から調査の公費負担を求める依頼があったため、東大阪市教育委員会では至当と判断し、試掘調査を実施した。試掘調査は南北2か所に、2m×3mのトレンチを設定した。北側のNo1地点では、地表下-0.4mの第3層と-0.6mの第4層からそれぞれ土師器が出土した。南側のNo2地点では、地表下-0.2mで土師器・須恵器を包含するピット・土坑を検出した。No1地点第3層の土師器は奈良時代のものであった。このため、地表下-0.1m以下の掘削を申請地で行う場合には、事前の発掘調査が必要である旨通知した。

東大阪市稻葉2丁目145番地の1において、木造3階建個人専用住宅の建設を予定している個人から、東大阪市教育委員会宛、土木工事施工届及び埋蔵文化財発掘の届出が提出された。申請地は、周知の稻葉遺跡内にある。稻葉遺跡の調査は少ないが、大阪府教育委員会が実施した調査で、弥生時代前期の遺物が確認されている。東大阪市教育委員会では、埋蔵文化財への影響が考えられるため、工事に先だって試掘調査が必要な旨通知した。本件は個人住宅建設に伴うものであることから、東大阪市教育委員会では公費負担が至当と判断し、試掘調査を実施した。試掘調査は2m×3mのトレンチを1箇所設定した。地表下-1.15mの第3層から、近世期～近代期の瓦、土師器、須恵器が出土した。土師器・須恵器は二次堆積であるため、届出者には、工事を慎重に実施するよう通知した。



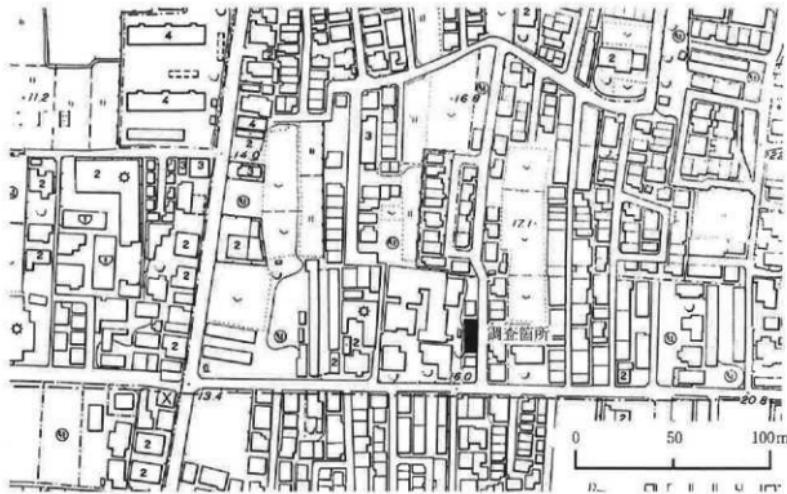
神並遺跡・稻葉遺跡試掘調査 土層柱状図

## 第2章 船山遺跡第4次発掘調査

### 1)はじめに

平成10年9月3日、東大阪市六万寺町3丁目559番地の1において、鉄骨造3階建個人専用住宅の建設を予定していた個人から、東大阪市教育委員会宛に埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これは建設予定地が周知の船山遺跡の範囲内にあたるためになされたものであった。東大阪市教育委員会では該当工事の実施により埋蔵文化財への影響が考えられると判断し、届出者に対して工事に先立って試掘調査が必要である旨通知し、また同様の内容を大阪府教育委員会宛副申の上、その指示を仰いだ。平成11年4月15日に試掘調査を行った結果、地表下-15~30cmの間に土師器・須恵器が包含していることが判明、事前に発掘調査が必要である旨届出者に通知した。両者は埋蔵文化財の取扱いをめぐり協議に入り、連休明けから発掘調査に着手することで双方合意した。発掘調査は平成11年5月6日から5月10日までの3日間実施した。予定建物のうち排水溝を斟酌して、東西3.2m×南北10.3m、計約33m<sup>2</sup>のトレンチを設定し、調査対象とした。

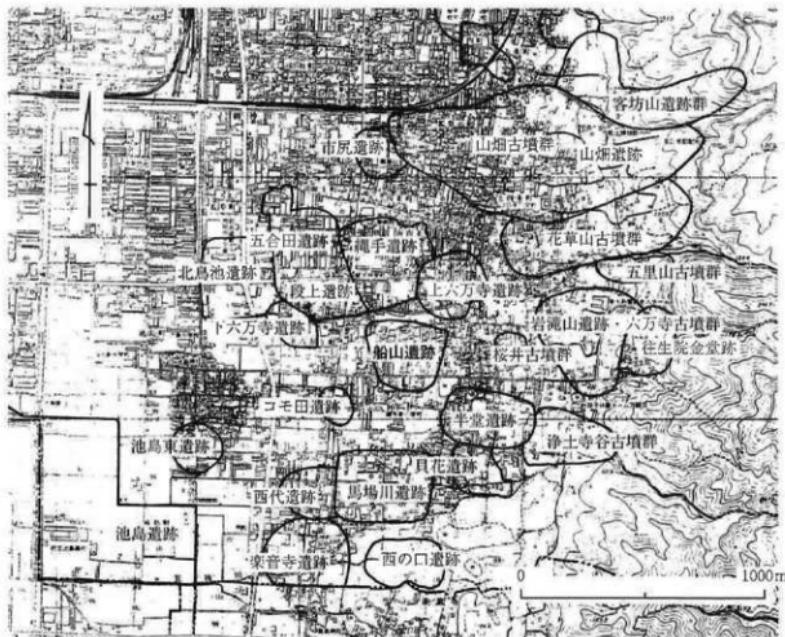
船山遺跡は、古墳時代後期から室町時代の集落遺跡、弥生時代後期の遺物散布地である。今回の調査までに、3次の調査が実施されている。第1次調査は昭和60年4月11日~4月25日に実施され、調査面積は46m<sup>2</sup>である。古墳時代後期の溝と繩文土器・須恵器・土師器・瓦器が検出された。第2次調査は平成5年8月17日~8月27日に実施され、調査面積は50m<sup>2</sup>であった。室町時代の溝が検出され、該期の土器・陶器・瓦・石硯が出土した。第3次調査は共同住宅に伴うもので、平成6年2月2日~6月8日に実施された。調査面積は494m<sup>2</sup>である。弥生時代後期の遺物包含層・古墳時代後期の溝、奈良~平安時代の柱穴・溝・井戸が検出された。奈良~平安時代の集落址としては本市の南端に位置する。



## 2) 位置と環境

船山遺跡は東大阪市六万寺町3丁目周辺に広がる集落遺跡・遺物散布地である。遺跡は生駒山地の西麓を西へ流下する小河谷が形成する扇状地上に立地する。遺跡の標高は約17~26mを測る。遺跡の範囲は、現在東西350m、南北300mに及ぶと推定されている。

飛鳥~奈良時代を中心に、船山遺跡の歴史的環境を見てみよう。承平年中(931~938)成立と伝えられる源順撰『和名類聚抄』には、河内国河内郡の郷名として、「英多 新居 櫻井 大宅 豊浦 須田 大戸」が挙げられている。郷名配列順序から、桜井郷は「六万寺・横小路・槇音寺の三村の地」と比定されている(『大阪府の地名Ⅱ』、p.778)。『河内志』には「六万寺 或称桜井」とあり、六万寺村の中心は桜井とする。桜井には式内社梶無神社が鎮座する。梶無神社は船山遺跡の範囲内にあり、元々梶無神社鎮座地の小字名は「船山」で、これが遺跡名として採用された経過がある。なお、延久4年(1072)9月5日の太政官釋(『石清水文書』所引)に山城石清水八幡宮護國寺領河内郡林灯油蔵が見え、その字名は「肆条梶無里」とあることを根拠に、現在下六万寺町3丁目辺りの小字梶無が神社の故地とする説も提出されている。桜井の名を負う氏族に桜井田部連があり、桜井屯倉の田部の伴造氏族とされている。天武13年(684)宿禰の姓を賜う。『続日本紀』天平16年(744)閏正月乙亥(11日)條に、「是日、安積親王脚病に縁りて桜井頓宮より還れり。」とあり、桜井頓宮の名が知られる。国史に散見されることから該期の集落形成は自明であり、屯倉・頓宮など集落の特殊性が浮掘りにされるとともに、集落の性格解明が大いに期待されるところとなっている。



第2図 船山遺跡とその周辺の遺跡

### 3) 調査の概要

#### (1) 層位

今回の調査で確認した層位は以下のとおりである。

第1層 表土。層厚5~8cm。

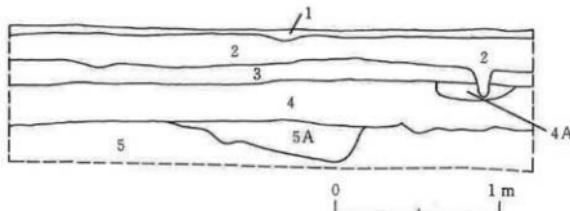
第2層 5YR5/6明赤褐色細礫~粗粒砂混じりシルト。層厚17~20cm。西端で凹んでいる箇所がある。杭穴と考えられる。該地では現代の旧建物建設時に旧耕土層は削平・消滅されていた。第2層は床土層に相当する。

第3層 10YR5/3にぶい黄褐色細礫混じりシルト~細粒砂。層厚10~15cm。発掘調査では遺物を少量確認したにとどまる。

第4層 7.5YR3/3暗褐色細礫。層厚24~32cm。上面は今回検出した遺構のベース面をなす。この層上面から摩滅した中世期の青磁碗破片が出土。西北部では4層を主体に3層が混入する層が見られ、これを4A層とした。4A層からは古墳時代の土器がまとまって出土した。

第5層 7.5YR4/6褐色中粒砂混じり粘土~シルト。無遺物。地山層。かなり堅く締まっている。5層とは鈍く暗色

化した層が北側で見られ、5A層としたが、この層も無遺物であった。現況では遺構を構成する土壤ではなく、5層の漸次変移と考えておく。



第3図 土層断面図

#### (2) 検出した遺構

第4層上面で、溝・ピットを検出した。以下、その概略を述べる。なお、各遺構内の出土遺物については7ページに一覧表を掲出しているので参照いただきたい。

溝1 トレンチ南端に位置する。東西方向の溝。溝底面のレベル差から、概ね西から東へ流下したものと考えられる。中央では溝底面がやや膨らむ。二又状のものが合流し、さらに溝3に流れ注ぐ。溝の南肩は未検出。溝の幅は62cm以上。二又部の北溝の幅は25cm。深さは6~10cmを測る。埋土は、10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり中粒砂であった。

溝2 トレンチ南部に位置。開いて溝3に合流する小溝。合流部で幅32cm、深さ6cmを測る。埋土は、10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり中粒砂であった。

溝3 トレンチ東端に位置。南北方向の溝。溝1・溝2・溝5と接続する。溝底面のレベル差から、北から南へ流下したものと考えられる。トレンチ中央やや南よりの東端部で二股に分かれる島状の突起を形成している。溝の東肩は未検出。溝の幅は40cm以上、深さは8cmを測る。埋土は、10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり中粒砂であった。

溝4 トレンチ南部に位置。緩やかに東へ流下する溝。遺存状態悪く全形不明。幅37~45cm、深さ9cmを測る。埋土は、10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり中粒砂であった。

溝5 トレンチ南部に位置。溝3から枝分かれする。東西方向の溝。溝底面のレベル差から、東から西へ流下したものと考えられる。幅24~33cm、深さ6cmを測る。埋土は、10YR5/3にぶい黄褐色シ

ルト混じり中粒砂であった。

溝6 トレンチ中央に位置。南北方向の溝。南部の溝群と切り合い関係を持つ。溝底面のレベル差から、南から北へ流下したものと考えられる。溝内部に径10cm前後的小穴を持つ。幅27~37cm、深さ4cm。埋土は、4層を主体に2,5Y6/4にぶい黄色中粒差が混入する層であった。

溝7 トレンチ中央に位置。溝6に切られている。幅30cm、深さ2cmを測る。埋土は、10YR6/2灰黄褐色シルト混じり中粒砂であった。

ピット1 中央部西端に位置。平面形は円形を呈する。長径30cm、短径25cm以上、深さ16cmを測る。埋土は4層を主体に3層が混入する層であった。

ピット2 中央やや北側に位置。平面形は楕円形を呈する。長径24cm、短径18cm、深さ10cmを測る。埋土は4層を主体に3層が混入する層であった。

ピット3 北側に位置。平面形は楕円形を呈する。長径65cm、短径42cm、深さ3cmを測る。今回検出したピットのうち最大のもの。埋土は4層を主体に3層が混入する層であった。

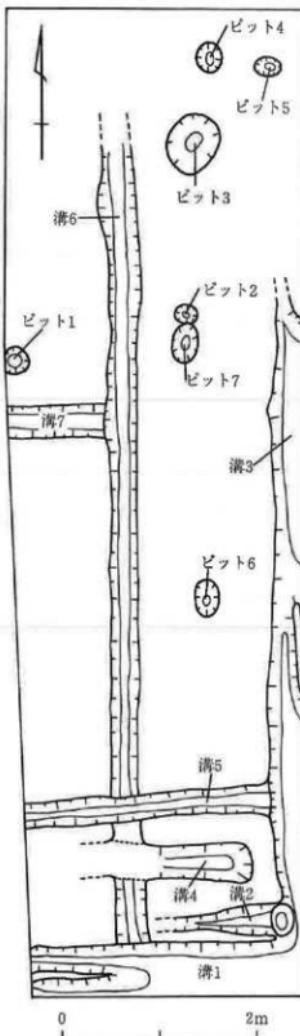
ピット4 北端に位置。平面形は楕円形を呈する。長径30cm、短径26cm、深さ11mを測る。埋土は4層を主体に3層が混入する層であった。

ピット5 北端の東側に位置。平面形は長楕円形を呈する。長径25cm、短径19cm、深さ4cmを測る。埋土は4層を主体に3層が混入する層であった。

ピット6 中央やや南側に位置。平面形は長楕円形・小判形を呈する。長径40cm、短径34cm、深さ3cmを測る。埋土は4層を主体に3層が混入する層であった。

ピット7 中央やや北側に位置。平面形は長楕円形を呈する。ピット2と接している。長径40cm、短径26cm、深さ3cmを測る。埋土は4層を主体に3層が混入する層であった。

溝・ピットの深さからして、遺存状態は悪く、中世期以降の大掛かりな土木工事によって、多くの遺構は滅失したと考えられる。



第4図 検出遺構実測図

遺構 ・層位名	弥生土器	土 師 器			須恵器	製 塩 土 器	瓦 器	青 磁
		古墳時代系	中世期系	その他の				
溝1		○甕	○皿		○			
溝2				○	○	壺蓋		
溝3		○高壺	○皿		○	○		
溝4	○			○	○	○	○	
溝5				○	○			
溝6	○	○甕	○皿		○			
溝7				○			○	
ピット1		○甕						
ピット3				○			○	
2~3層		○甕・瓶			○			○
4A層				○羽釜				
4A層	○甕							

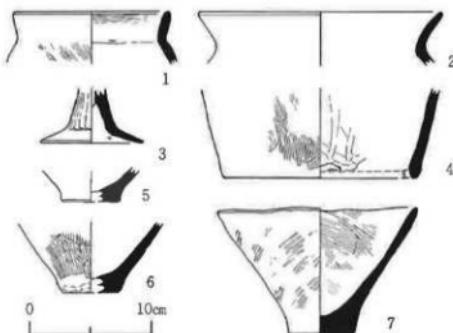
船山遺跡第4次調査出土遺物一覧表

これら溝・ピットの性格であるが、埋土の相違から、溝のうち南部に所在する溝1~溝5は、耕作に伴う鶴溝等が想定される。一方、南部の溝群に切られる溝6は、埋土の土質から中世期の集落に伴うものかと考えられる。ピット群も溝6と同様の性格を持つものと思われるが、建物を構成する柱通りは復元できない。前記のように、多くの遺構は滅失してしまったものと思われる。

#### 4) 出土遺物

今回の調査では、コンテナで約1箱分の遺物が出土した。まずその概要を述べる。

出土遺物の一覧表を上記に記載した。溝は1~7まで量の多寡を問わなければ、溝遍なく遺物が出土しているのに対して、ピットは1と3を除き、無遺物であった。土師器は細片ではあるが、中世期に属する小皿の体部片を溝1・溝3・溝6から確認している。このことと遺構の埋土・切り合い関係とを勘証すれば、溝群のうち古相に属



第5図 出土土器実測図



第6図 弥生土器 鉢(7)

する溝6ですら、中世期の所産であり、その他の溝はそれ以降、概ね近世期辺りの所産に推定できよう。中世期の限定性については、細片であるために詳らかにしない。ただし、これまでの調査成果では、鎌倉時代・室町時代の遺物が確認されていることから、鎌倉時代を潮り得ない中世期の一時期、と捉えることが可能となろう。

出土遺物は、古墳時代・弥生時代のものが大半を占め、かつ図示できる資料も該期のものに限られていた。ここでは図示した資料について説明を加えたい。

1は土師器壺の口縁部である。短く立つ口縁でわざかに外反する。頸部外面には斜め方向のハケメが残るが、口縁部はハケメの後ヨコナデを施し仕上げとしている。口縁復元径12.5cm。焼成は良好。外面にはぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する。胎土は密。溝1内出土。

2は土師器壺の口縁部である。「く」の字状に外反する口縁で、内外面とも摩滅が著しく、調整法不明。口縁復元径19.8cm。焼成は良好。外面は褐色(7.5YR4/3)を呈する。胎土は密。溝4内出土。

3は土師器高杯の脚部である。開いた脚柱部から裾部で明瞭に屈曲して括がる。脚柱部外面はヘラ状工具によるナデ、内面はナデが施される。裾部内面下端にハケメがわざかに遺存する。全体に風化激しい。脚部復元径8.2cm。焼成は良好。外面は黄橙色(7.5YR7/8)を呈する。胎土は密。溝3内出土。

4は土師器壺の底部である。底部端から大きく開く。外面は縱方向のハケメ、内面は強いナデが施される。底部復元径15.6cm。焼成は良好。外面は黄橙(7.5YR7/8)を呈する。胎土は密。第2～3層内出土。

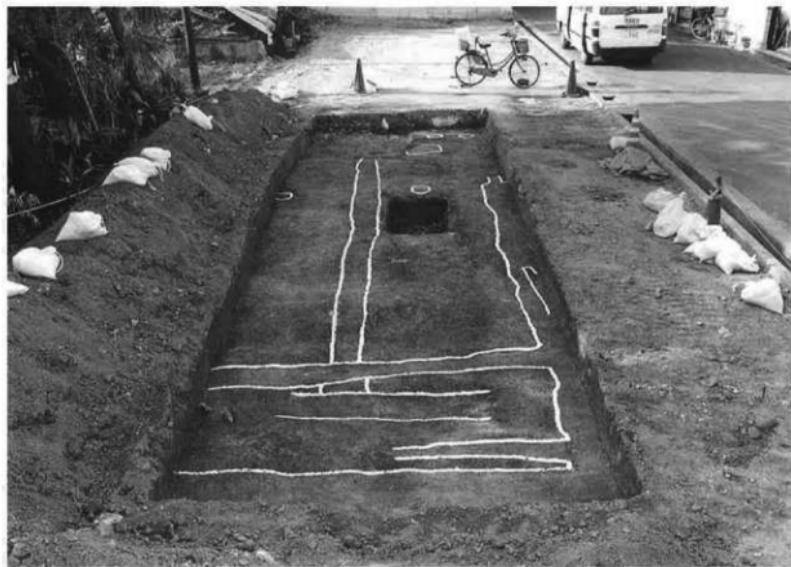
5・6は弥生土器壺の底部である。5は底部端外面にわずかにナデの痕跡が認められる以外は摩滅が著しく、調整法不明。底部径4.6cm。焼成は良好。外面は橙色(5YR6/8)を呈する。胎土は密。長石・雲母・角閃石を多く含む。生駒西麓産。溝6内出土。6は底部から直線的に開く形状である。外面には残存部の上位に縱方向のヘラミガキ、下位にハケメが施される。底端には指頭圧痕を残す。内面はナデが施されている。下位から底面にかけて黒斑がつく。底部径4.6cm。焼成は良好。外面にはぶい赤褐色(5YR4/3)を呈する。胎土は密で、長石・石英・黒雲母を含む。溝6内出土。

7は弥生土器の鉢である。底部から直線的に開く体部を持つ。口縁部端面には調整が施されていない。壺の分割成形技法による鉢形土器である。外面は細かなタタキ目が施された後、ナデで軽く消されて仕上げる。内面には斜め方向のハケメが施される。外面の体部上位と底部に黒斑がつく。全形の3分の2が残存。口径復元径16.1cm、底部径5.0cm、器高10.5cmを測る。焼成は良好。外面の色調はぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。胎土は密で、生駒西麓産。第4A層内出土。

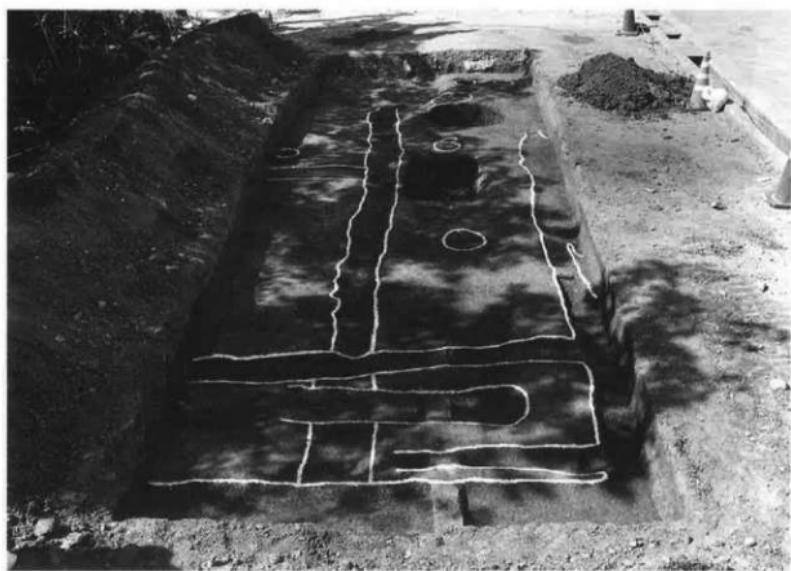
##### 5)まとめ

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代・弥生時代の土器を主体に含むものの、全て中世期、少なくとも、鎌倉時代以降の所産であることが判明した。これは、従前の調査成果で、試掘時に古墳時代遺物包含層とされた層が実はごく近年の盛土層であることがわかった例(第2次調査)と軌を一にするものである。表現を変えれば、中世期の段階で、耕地拡大を目的に大掛かりな土木工事や整地工事が行われたため、該期の遺構や遺物包含層に古墳時代以前の古相の遺物が混入することになったと推定される。「位置と環境」で記した式内社櫛無神社創建期に潮る遺構確認と、同期集落の性格解明が船山遺跡調査の大きな課題に設定できると考えられる。しかし現状では詳らかにしない。今後の調査進展に期待したい。

図版1 船山遺跡第4次調査  
遺構



第4層上面遺構検出状況



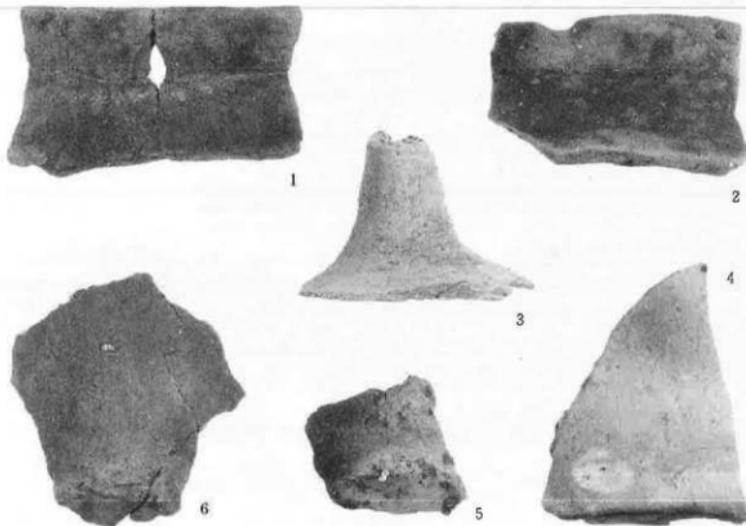
第4層上面遺構掘削後状況

図版2

船山遺跡第4次調査  
遺構・遺物



作業風景



出土土器(土師器・弥生土器)

### 第3章 小若江遺跡第4次発掘調査

#### 1) 調査に至る経過

東大阪市小若江3丁目334番地の1・3に所在する周知の小若江遺跡内において、学生寮を建設予定の個人事業主より、平成11年6月8日付けで埋蔵文化財発掘の届出が提出された。東大阪市教育委員会では同年7月28日に試掘調査を実施したところ、現地表面下0.5~0.9mで中世~近世期の遺物包含層とビットを確認した。この結果、工事予定地約100m<sup>2</sup>の事前の発掘調査実施を巡り事業主と東大阪市教育委員会とは直ちに協議に入った。協議に伴い、排水の位置や搬出車両のスペースを確保することが必要となったため、①西側の道路から東へ約5m控えた箇所を前述のスペースとすること、②5m区間の未調査部分については、本体工事と併行して立会調査とすること、で双方合意した。

発掘調査は東大阪市教育委員会文化財課を調査主体とし、同課菅原章太が担当した。平成11年8月10日から同年8月23日までの10日間実施した。調査面積は約82m<sup>2</sup>であった。

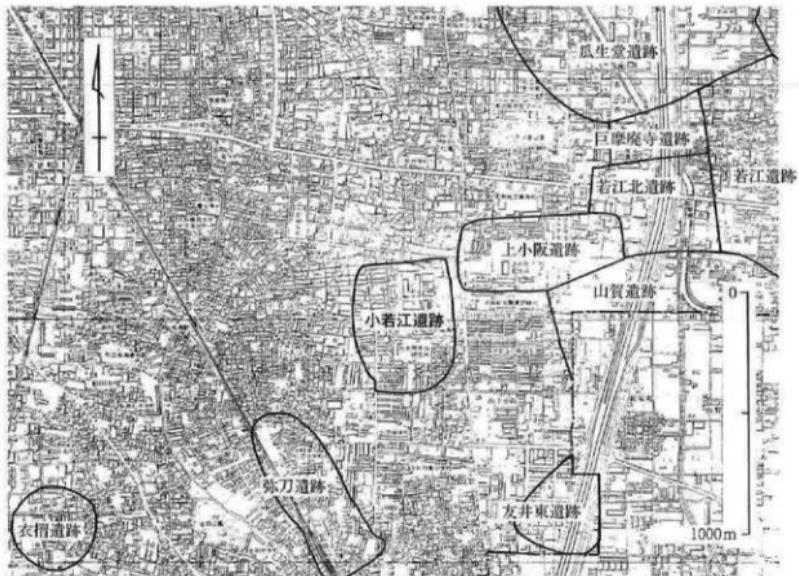


第1図 小若江遺跡第4次調査位置図

## 2) 小若江遺跡の位置と歴史的環境

小若江遺跡は、東大阪市小若江3丁目を中心同2丁目と近江堂3丁目の各一部を包摂する地域に広がる複合遺跡である。遺跡の中心部は近畿大学長瀬キャンパスにあり、東大阪市関係機関のほか、近畿大学でも発掘調査が実施されている点については後述する。遺跡の範囲は、東西約400m・南北約550mに及ぶ。遺跡は現在の標高で5m~6mを測る。地理的には、大阪府の東城を画する生駒山地と西の上町台地に挟在する、河内平野の中央部に位置する。河内平野は南東から北西に流下していた旧大和川の堆積作用によって形成された沖積平野で、小若江遺跡は旧大和川の自然堤防上の微高地に立地すると考えられる。ただし、これら自然地理学上の遺跡立地論については、松田順一郎氏の研究成果(第3章に掲出の文献など)を参照いただくこととして、ここでは詳論を避けたい。

一方、小若江遺跡周辺の遺跡の調査成果から、東大阪市中地区の歴史を概観すると、山賀遺跡・瓜生堂遺跡などで弥生時代前期の住居跡が見つかっており、当該期から人々がこの地で暮らしていたことが知られる。中期以降には瓜生堂遺跡に加えて、若江遺跡・巨摩庵寺遺跡で集落が営まれ始め、水田や墓も検出されている。古墳時代に入ると、意岐部遺跡などで集落が出現し、巨摩庵寺遺跡では古墳も築造されている。飛鳥~奈良時代になるとこの地域に若江寺が建立される。若江遺跡第38次調査では当該期の瓦が多数出土している。また若江郡衙も若江寺近隣に所在することが推定されている。平安~鎌倉時代では、若江遺跡で井戸などの遺構や多数の土師器・瓦器が出土している。室町時代には、若江城が築かれ、河内半国の守護所とともに畠山氏の内紛による戦国乱世の係争地ともなった。



第2図 小若江遺跡とその周辺の遺構

### 3) 小若江遺跡の既往の調査

昭和15年、日本大学大阪専門学校(現・近畿大学)のグラウンド整備に伴う工事で南北2箇所の池が掘削された。地下1~2mの地点(遺物検出の深度については諸説がある)から多量の遺物が出土した。北側の池を小若江北遺跡、南側を小若江南遺跡と当時呼称している。同年大阪府・京都帝國大学(当時)による調査が初めて実施された。調査の結果、遺構は確認されなかつたが、土師器・須恵器などが出土した。小若江北・南遺跡の出土遺物は、昭和31年坪井清足氏の『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』の中で、王泊遺跡各層出土土器の比較資料として紹介された。その後、小若江北遺跡の土器は、昭和13年調査の奈良県天理市布留遺跡出土土器のうち、その一部をより純粹に含んでおり、同遺跡の土師器がさらに細分されることを明らかにした。以降、小若江北遺跡出土土器は布留式土器の代表例として、学史的意義を有するに至る。遺跡の名称については、「小若江北遺跡」、「小若江南遺跡」のほか、「近畿大学構内・長瀬遺跡」とも称されていたが、現在は「小若江遺跡」として埋蔵文化財保護に努めている。なお今回の調査成果に即して中世期の遺物に注目すると、『近畿大学周辺史』(近畿大学商経学会研究叢書第二輯、1958年。)には、瓦質土器羽釜の脚部が報告され、「小若江考古学」第4号(近畿大学附属高等学校地歴研究同好会、1970年。)所収の「小若江遺跡緊急調査報告」には地表下-1.3mの灰色粘土層から多数の瓦器・須恵器を採集したことを伝える。同報告では、近畿大学附属高等学校の旧校舎構内で、10箇所のトレーンを設定したとされているが、調査地点の特定は未詳である。

一方、小若江遺跡ではその後目立った調査が行われなかつたが、昭和50年代より近畿大学の関係団体と東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会が合計7次にわたる調査を実施してきた。近畿大学とその関係団体による調査では、第2次調査で弥生~古墳時代の遺物が比較的まとまって出土している以外では、一括性の高い遺物はほとんど見られない(『小若江遺跡-近畿大学構内発掘調査報告書』、1986年。)。東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会による調査では、まず第1次調査で、14~15世紀代の井戸1基が検出され、内部には土師器小皿・瓦器椀・陶器などが含まれていた。また土師器小皿を多数含む凹地も発見されている。第2次調査では近世・室町時代の耕作痕跡、平安~鎌倉時代の溝・柱穴・井戸が検出された。弥生~古墳時代の遺物も出土したが遺構は確認されていない。

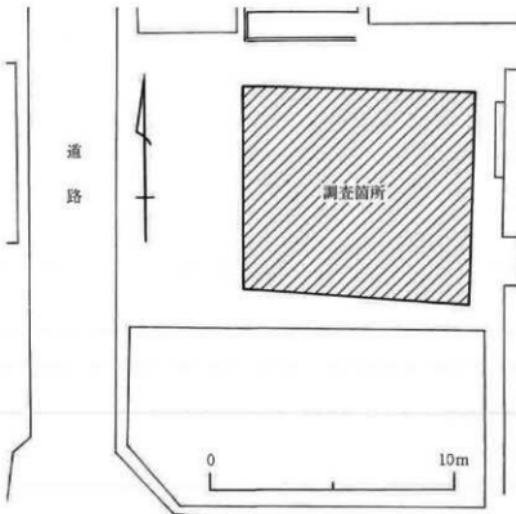
主体	次数	調査原因	調査期間	調査地	調査面積(m <sup>2</sup> )
近畿大学関係団体	1次	近畿大学校舎増築	1968.12~1969.2	近畿大学構内	68
	2次	近畿大学附属幼稚園増築	1974.12.7~1974.12.31	近畿大学構内	87
	3次	近畿大学附属幼稚園増築	1978.9.1~1978.9.30	近畿大学構内	129
	4次	近畿大学農学部校舎増築	1979.7.2~1979.8.3	近畿大学構内	25
東大阪市関係機関	1次	共同住宅建設	1987.12.1~1987.12.5	小若江3丁目312-5	40
	2次	学生寮建設	1998.6.3~1998.8.5	小若江2丁目167-28	278
	3次	共同住宅建設	1998.9.2	小若江3丁目315-17ほか	10
	4次	賃貸共同住宅建設	1999.8.10~1999.8.23	小若江3丁目334-1,3	82

小若江遺跡調査一覧表

#### 4) 調査の概要

##### (1) 調査の方法

調査トレンチは、建設予定地約100m<sup>2</sup>のうち、排土の車輌と置場のスペースを確保するため、西側道路から約5m、隣接する家屋から約1m控えた箇所に設定した。調査の目的としては、試掘調査結果に基づいて、中世期～近世期の遺構面積を主眼とした。このため、試掘で遺構を検出した地表下-0.6mまで重機による掘削を行った後、それ以下の深度について人力による掘下げと精査を行った。調査の掘削は、本体工事の掘削最深度まで行った。概ね地表面から東側1.5m、西



第3図 調査トレンチ位置図

側2.0mとなった。古墳時代の遺構面まで至っておらず、調査地に該期の遺構面が広がるかどうかは未詳である。調査地を東西線・南北線で4等分し、それぞれ北東・北西・南東・南西と地区名を設け、便宜的な地区割とした。この地区割は遺構の位置、遺物の取上げに活用した。標高値は、調査に北側にある市立上小阪小学校の下水道ポイントから移動した。従って、数値はO.P.値となっている。現地表面は調査地北側で、O.P. 5.359mである。

##### (2) 層位

調査は、試掘調査で確認した層位に準拠する形で進めた。今回確認した層位は以下のとおりである。

第1層 現代の盛土。層厚23~38cm。

第2層 5Y8/8黄色粗粒砂。層厚20~47cm。現代盛土の一部で、調査地西側では、2層上面が地表面となっている。東に行くに従い、層厚は薄くなる。中央から西側では耕土層と見られる、5Y5/1灰色シルト混じり粘土が2層の下面に介在する。これを2L層とした。

第3層 土質・土色を中心に3層に区分した。

3A層 5Y5/1灰色シルト混じり極細粒砂。細礫を少量含む。層厚13~16cm。調査地の全面に堆積する。下面には耕作に伴う植物痕跡の凹凸が見られる箇所がある。近世期の遺物が出土。

3B層 5Y6/2灰オリーブ色細礫～粗粒砂混じりシルト質中粒砂。層厚18~36cm。次の3C層上面の掘りこみの埋め土である。

3C層 5B4/1暗青灰色粘土混じり極細粒砂。細礫～粗粒砂を中量含む。層厚24~29cm。マンガン粒の沈着が顕著に認められる。上面は、3B層を主体とする近世期～近代期の掘りこみの遺構面をなす。調査では中世期遺構の検出を目的にしたため、土層断面で確認した。

第4層 土質・土色を中心に2層に区分した。  
4 A層 5G4/1暗緑灰色粘土混じり極粗粒砂・粗粒砂。層厚17~33cm。上面は遺構面を形成する。

4 B層 7.5Y6/3オリーブ黄色粘土混じり極細粒砂。層厚7~15cm。調査地西側で4 A層下面に介在する。

第5層 土質・土色を中心に2層に区分される。  
5 A層 10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり粗粒砂。層厚24~32cm。土壤はよく締まっている。調査地西側に見られる。西端では杭穴状の凹凸が顕著である。

5 B層 5BG5/1青灰色粗粒砂。層厚13~18cm。調査地東側で、上面レベルが5 A層とほぼ同位置に見られる層である。土坑8の遺構面をなす。

第6層 7.5GY5/1緑灰色粘土混じり粗粒砂~中粒砂。層厚12cm前後。調査地中央から東で見られる。中世期の瓦器塙などを少量含む。

第7層 10YR5/6黄褐色中粒砂混じりシルト。層厚24~29cm。調査地東側で確認。

第8層 10YR4/1褐灰色粗粒砂混じりシルト~シルト質粘土。層厚26cm以上。東側では最下層。断面観察からこの層上面をベースに自然流路が流下していたことが知られる。自然流路の堆積層は5層に区分できた。

8 A層 106G/1緑灰色粘土混じり細粒砂。層厚8~30cm。

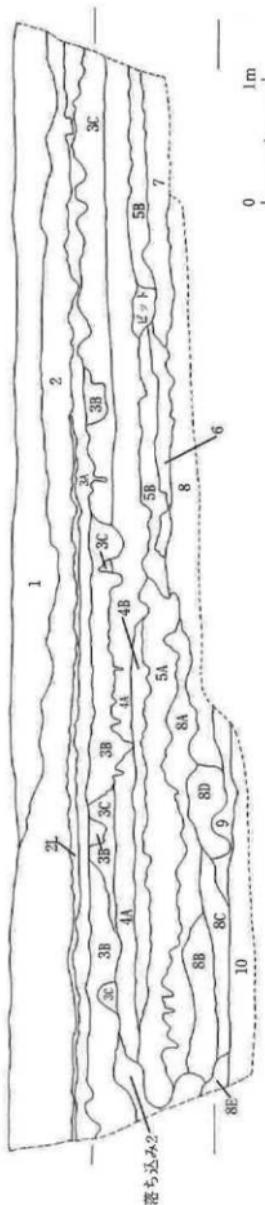
8 B層 5BG6/1青灰色粘土混じり細粒砂。層厚16~25cm。

8 C層 10BG6/1青灰色粗粒砂と同色シルトの互層。層厚13~20cm。

8 D層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じりシルト。層厚30cm前後。植物遺体を含む。土層の断面から瓦質土器の羽釜が出土した。

第9層 5BG6/1青灰色粘土混じり細粒砂。層厚13~16cm。

第10層 7.5GY5/1緑灰色粘土混じりシルト。層厚20cm以上。今回確認した層位の最下層。



第4図 土層断面図

### (3) 遺構

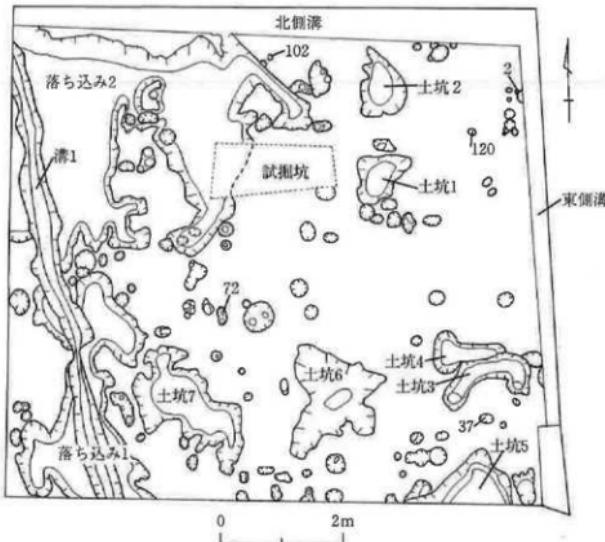
4層上面で、ピット104個・土坑7基・落ち込み3ヶ所・溝1条を検出した。これらは出土遺物の年代観から、15世紀代の所産と想定される。以下、4層上面検出遺構の概略を記しておきたい。

ピット 平面のプランが數十cmで完結するものをピットとした。平面形では円形を呈するものが多く、他に楕円形・隅丸方形・不定形のものが見られる。ピット内部からの遺物の出土は僅少で細片であった。今回の調査地でのピット分布は全面にわたり、偏りは見られない。ピット内の埋土は3種類に大別できた。そのうち明黄褐色(2.5Y6/6)系が9割以上を占め、灰オリーブ色(7.5Y4/2)系、明黄褐色系と灰オリーブ系のブロック土がこれに次ぐ。円形で径が10cm以下のものは杭穴と考えられるが、明確な構造物のラインを形成するものは見られない。径または長径が25~30cmを測るピットの大半は柱穴と考えられる。ただしその深度や埋土の相違から、ピットとしたものの中には、耕作植物の株痕跡の可能性があるものも含まれていると想定される。なお、図面で検討したが、今回検出したピットで柱通りを構成するものは認められなかった。

土坑・落ち込み ここでは遺構のラインが調査地内で完結するものを土坑、完結せずに調査地外へ延びるものを落ち込みとした。土坑5は、調査地南東隅で検出されたもので、南へ延びるが、平面形は方形を呈すると考えられる。埋土から少量の遺物が出土した。土坑5の埋土の堆積状況は第6図に示すとおりである。①層は明黄褐色系のピットと同質で、明黄褐色(2.5Y6/6)細礫混じり極細粒砂であった。②層は第6層を主体に①層がブロック状に混入した土壤。③層は黄色(5Y7/6)シルト混じり細粒砂で細礫を中量含む。④層は黄褐色(2.5Y5/6)粘土混じり中粒砂であった。

その他の土坑・落ち込みは、不定形が多く、深さは20cm前後、遺物はほとんど含まれていない。

溝 調査地の西端で溝1を検出した。規模は幅40~50cm、深さ15cmを測る。溝1は底面のレベル差により南から北へ流下したものと考えられる。埋土や周辺の状況から、溝1は落ち込み



第5図 遺構実測図

1や落ち込み2の埋没後に一過性に流下し堆積したものと考えられる。埋土は浅黄色(5Y7/6)中粒砂である。出土遺物は少ない。

調査の終了日に、確認掘りを行っていたところ、5B層上面で土坑8を検出した。土坑8は、調査地北東のコーナーから南に2.1m、西へ1.6mの地点に位置する(第8図)。溝形の椭円形を呈し、長径1.1m、短径0.8m、深さ29cmを測る。土坑内から瓦器焼片が出土した。14世紀代の所産と考えられる。同様の遺構は土層断面からも確認した。

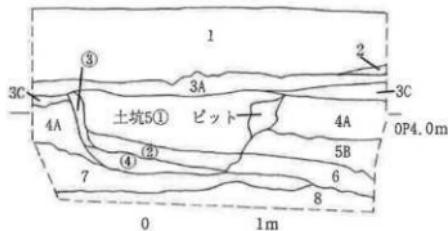
#### (4) 遺物

今回の調査では、コンテナで約2箱の遺物が出土した。ほとんど破片資料であるため、以下の説明にあたっては、法量の記載を省くこととする。

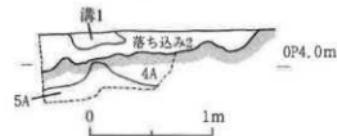
##### 土坑5出土土器(第9図)

土器類 小皿が5点ある。1・2は底部から屈曲後、体部がラッパ状に大きく開き、口縁部のヨコナデが強いため体部との境が屈曲する。体部下半は指頭痕が残る。1は白色系、2は褐色系。15世紀代。3の底部は平坦で体部はなだらかに内彎気味に立ち上がる。口縁部先端は丸くおさまる。4は口縁部のヨコナデの幅が短く体部から内彎して立ち上がる。5はほぼ全形の知られる資料である。内面全体に褐色の付着物が見られる。底部は「へそ皿」で底部から体部上半まで指頭痕が帯状をなして明瞭に残る。白色系。土坑の下位面から出土した。

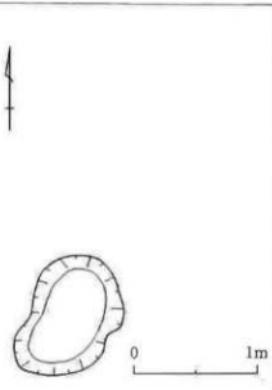
瓦質土器 6～8はすべて河内・和泉型瓦質焼成土器の描鉢である。6が土坑の上位面、7・8が下位面から出土した。6は口縁部外面下端を下方に拡張せず、端部は内彎気味に終る。内面に深い凹線があり、その上部の



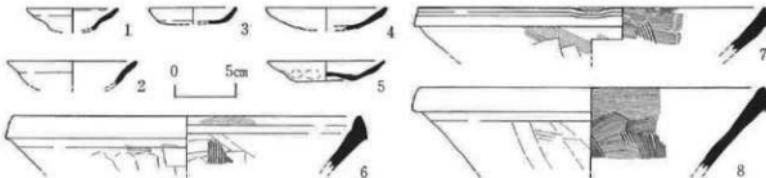
第6図 土坑5断面図



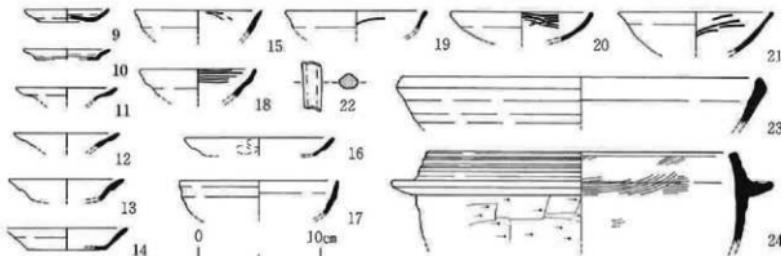
第7図 溝1・落ち込み断面図



第8図 土坑8平面図



第9図 土坑5内出土遺物実測図



第10図 その他の遺構内出土遺物実測図

みハケメがナデ消されずに残る。7・8は口縁部外面下端を下方に拡張するタイプで、7は口縁部外面の幅が狭い。内面のハケメは残存部全体にナデ消されずに残る。片口も遺存している。8は体部上半から横方向にヘラケズリの後、縱方向の強いイタナデが施される。14世紀後半から15世紀代に属するものと思われる。

#### その他の遺構内出土土器(第10図)

土師器 9~14は小皿である。9は底部が盛り上がる「へそ皿」タイプで、体部から内彎気味に立ち上がる。10~14は口縁部を強くヨコナデ調整するために、指頭痕を残す体部との境が大きく屈曲する形態を持つ。とくに11・13は体部がラッパ状に開き、口縁部は外反し端部中位で肥厚するものである。体部の指頭痕のナデ消しは差が見られることから、15世紀の中葉から後葉に属するものと思われる。13は白色系、その他は褐色系。9・11は落ち込み2、10はピット37、12はピット2、13は土坑7、14は落ち込み3各出土。16は中皿と見られる。口縁部まで指頭痕が残り体部境の屈曲は弱い。このためラッパ状に開いた後直線的に口縁部まで続く。ピット102出土。褐色系。17は大皿ないし塊と見られる。体部はやや開いて立ち上がる。体部上半から口縁部にかけて2回のヨコナデにより二段に屈曲するが、口縁端部の立ち上がりは弱くわずかに外反する。土坑8出土。褐色系。13世紀末前後に属するものと思われる。

瓦器 18~21は壺である。全て和泉型。破片であるが全体の器形は浅い壺形を呈すると見られる。18は口縁部と体部境の屈曲がやや強いほかはいずれも弱い。20のように内彎気味に立ち上がるものもある。内面は口縁部付近までヘラミガキが認められる。尾上編年のIV~3~4期に比定され、14世紀前に属するものと思われる。18・21は溝1、19は落ち込み2、20は土坑8各出土。

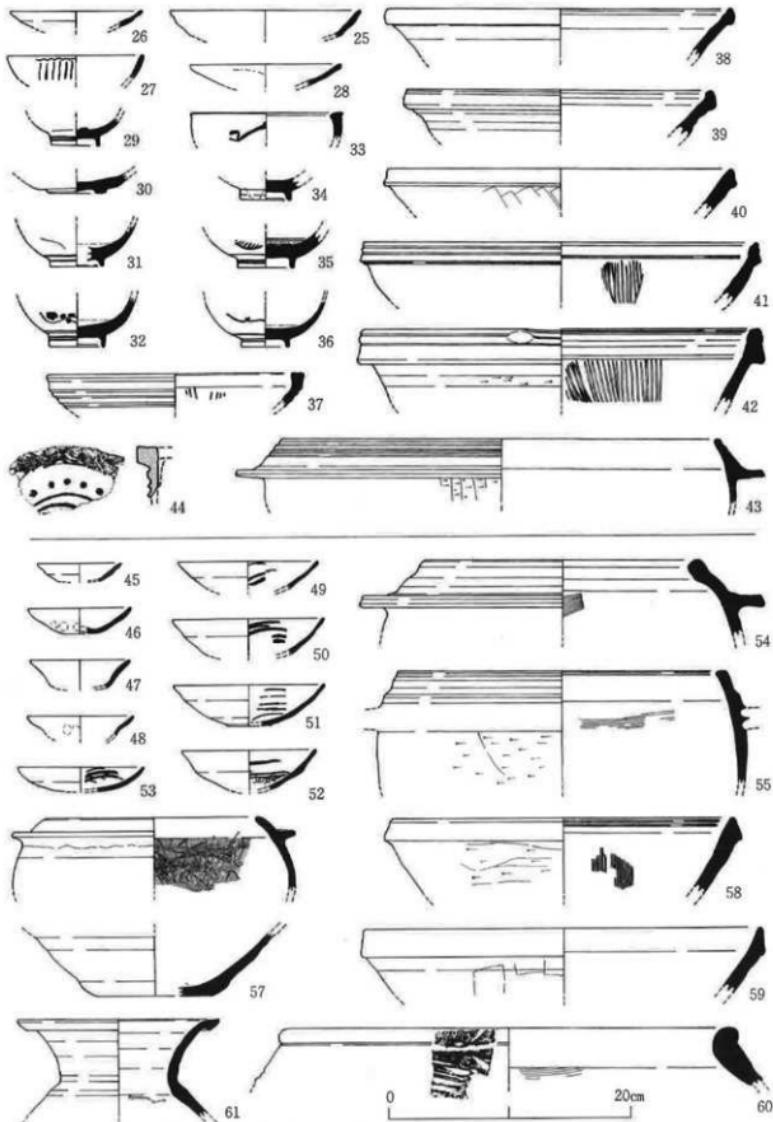
中世須恵器 23は東播系須恵器の捏鉢と見られる。口縁部外面の幅は狭く、端部の上・下方への引き出しは見られない。断面はほぼ方形を呈する。胎土に黒色・白色磁物が含まれる。口縁部内面に浅い1条の凹線が施される。12世紀中葉に属する。ピット72出土。

瓦質土器 22は羽釜の脚部。最大径で1.5cmを測る。ピット120出土。24は羽釜の口縁部~体部である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部で面を持って終る。口縁部外面に3条の凹線が施される。鉢は幅が狭くつまみ上げて外上方に延びる。体部外面はヘラケズリが施される。内面は鉢部裏面を中心に横方向のハケメが残る。体部下半内面の横方向のハケメはナデ消されるが一部遺存する。昔原分類の和泉D 1型に相当し、15世紀代に属する。落ち込み2出土。

#### 包含層内出土遺物(第11図)

① 3 C 層内出土遺物 近世期の遺物が主体を占める。

27は中国製青磁小碗の口縁部である。体部外面に片切影の幅広の連続した蓮弁を描く。14世紀後半



第11図 包含層内出土遺物実測図(上; 3C層、下; 4A層以下)

から15世紀前半に属す。29・31～33・35・36は中国製青花碗と見られる。見込には重ね焼きが見られる。32は花卉を描く。

37は中世須恵器の系譜を引く焼締陶器の擂鉢である。口縁部は短く直立し、外側の幅は狭い。端面はナデにより平坦で浅い凹線がめぐる。内面は凹んで体部には4条を1単位とする指目が付く。38・39は東播系須恵器の捏鉢である。いずれも口縁端部を上・下方ともに膨らみを持たせる。39は口縁部を内側に折り曲げている。41・42は備前焼の擂鉢である。41は焼締の度合いが低く赤色(柿色)を呈す。42は近世期に下る資料である。瓦質土器羽釜の43は前掲の24と同型式のもの。44は軒丸瓦。内郭に珠文と巴文が遺存する。

#### ② 4 A層以下の層内出土遺物 瓦器塊が多く出土した。

45～48は土師器皿である。46の体部はラッパ状に開くが外反せずに直線的に続く。体部下半外面の指頭痕は顕著に残る。他は前記と同タイプである。全て4 A層出土。54は羽釜である。体部は内傾して立ち上がり、内端部は肥厚する。内面中位に凸線が見られる。凸線は稜を持つ。鍔は水平に付く。体部外面には煤の沈着が著しい。昔原分類の河内B 2型に相当する。14世紀代に属す。5 B層出土。

49～53は瓦器塊である。遺構内出土例より口径が大きく、50～52では口縁部内面の先端までヘラミガキが認められる。尾上編年のIV～二期資料を含みもつと考えられる。51・53は5 B層、52は6層、その他は4 A層各出土。宋銭「元祐通寶」が出土している(第12図)。初鑄年は元祐元年(1086)である。

55・56は瓦質土器羽釜である。56は体部下半から底部に3脚を伴うタイプ。鍔は水平に付く。体部内面はナデ調整により平滑に仕上げられている。55は4 A層、56は8 D層各出土。60は壺である。短く内傾する頸部と短く外反する口縁部からなる。口縁端部は外下方に拡張し玉縁を呈する。頸部直下から並行タキメが施される。外面は灰白色を呈する。15世紀前半に属すと思われる。4 A層出土。

#### 5)まとめ

出土遺物の年代観から、今回検出した遺構の時期を推定してみたい。

まず、土坑5をはじめとする遺構内から出土した遺物中最も下るものは、土師器皿で15世紀中葉から後葉の所産と考えられる。一方、遺構のベース層となる4 A層から瓦質土器の壺が出土し、これは15世紀前半に属すと思われ、上記の土師器皿の年代観と矛盾しない。さらに遺構の上面となる3 C層からは、16世紀以降の遺物が出土している。これらのことから、検出遺構は概ね15世紀後半頃の所産と位置付けることが可能である。

この年代観に基づき、史料を検索すると、次のものが得られた。『華頂要略』明応9年(1500)11月25日の玄某讓状〔『大日本仏教全書』128卷所収〕には、「天王寺別当料所之内河内国小若江庄御代官職被仰付候御教書在之」と見え、四天王寺領の莊園が当地に点定されていたことが知られる。また、『大阪府全志』の河内国若江郡弥刀村大字小若江の項には、「真願寺は(中略)永正15年(1518)11月18日の創建なり。」とあって、当地に古刹の存在が知られる。遺構の時期と史料の年代とは、いくらか時間の隔絶があり、建築物や石造物など多方面からの検討が必要となるが、従前遺物の出土のみ取り上げることが多かった中世期の小若江遺跡の様相を解明する手がかりになると思われる。課題として提起するとともに、今後の本遺跡の調査進展に大いに期待したい。



圖版1 小若江遺跡第4次調查 遺構



第4層上面遺構検出状況

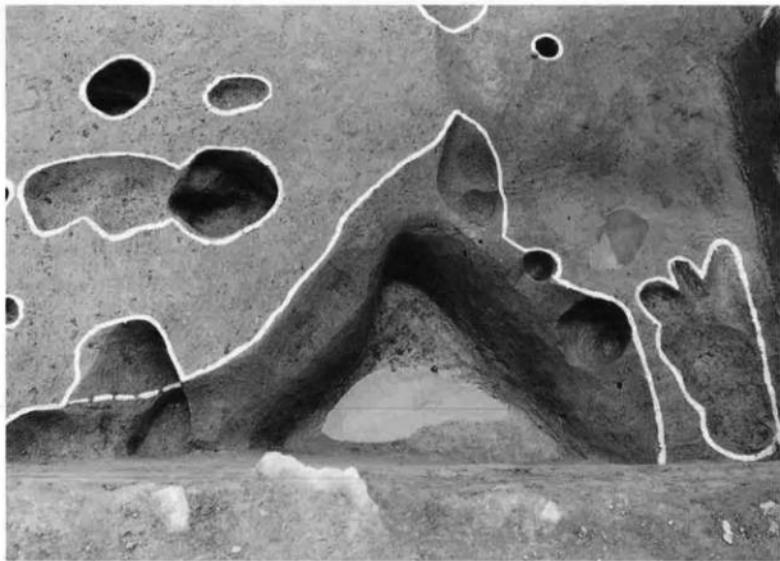


第4層上面遺構掘削後状況

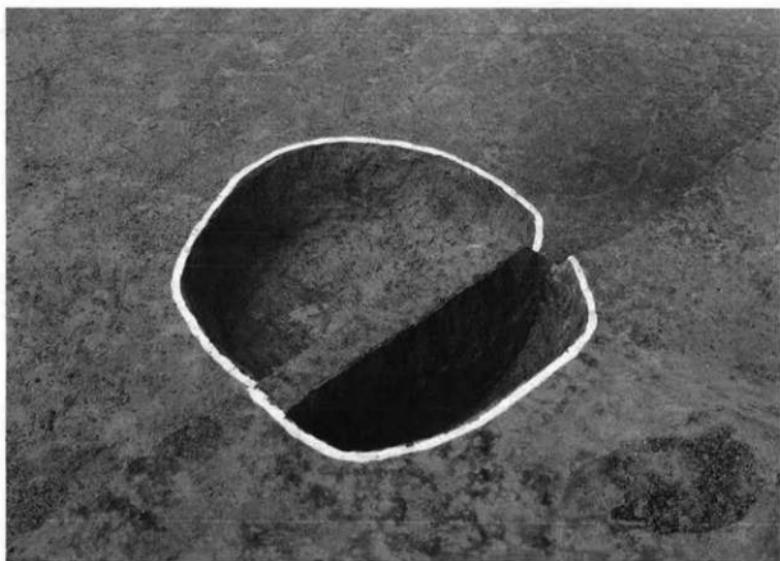
圖版2

小若江遺跡第4次調查

遺構

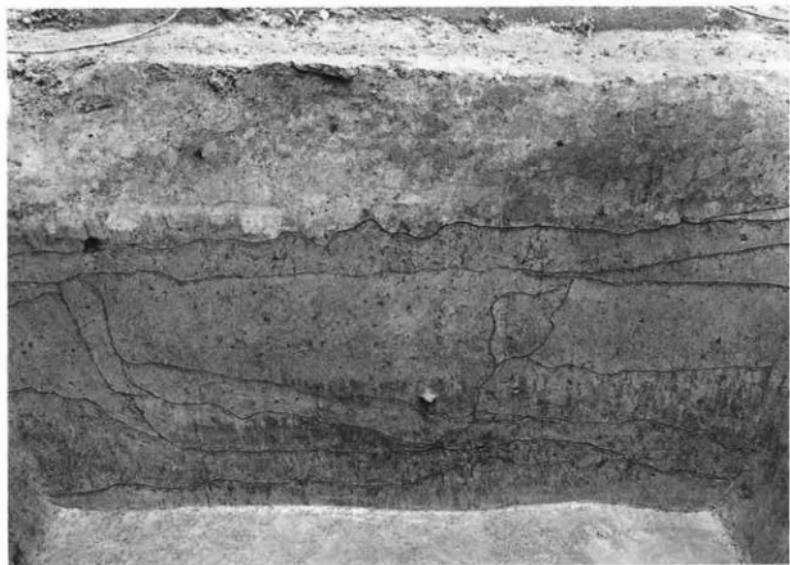


土坑 5 他掘削前後狀況



土坑 8 掘削後狀況

圖版3 小若江遺跡第4次調查 遺構

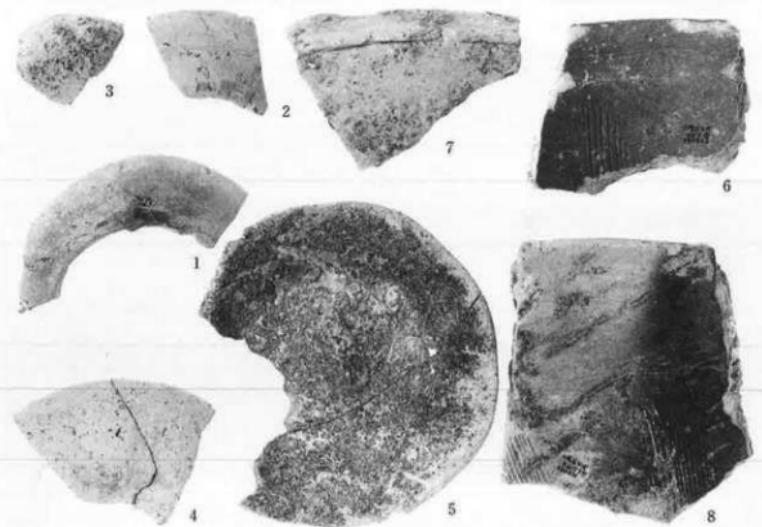


土坑5断面

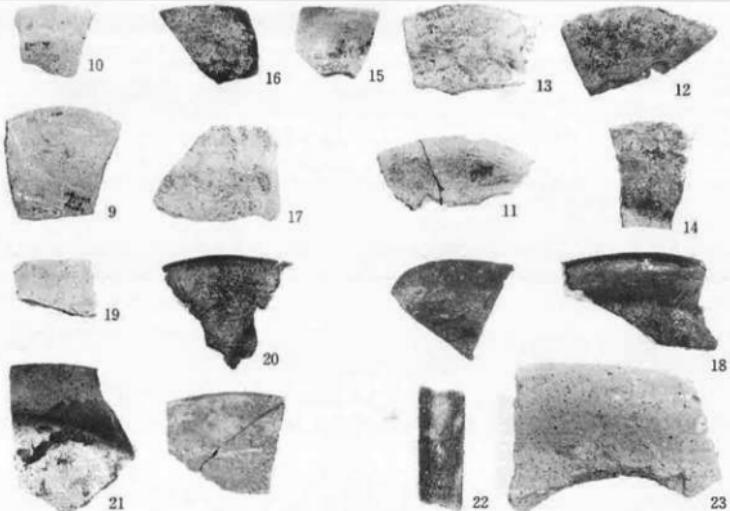


北壁断面

図版4 小若江遺跡第4次調査  
遺構

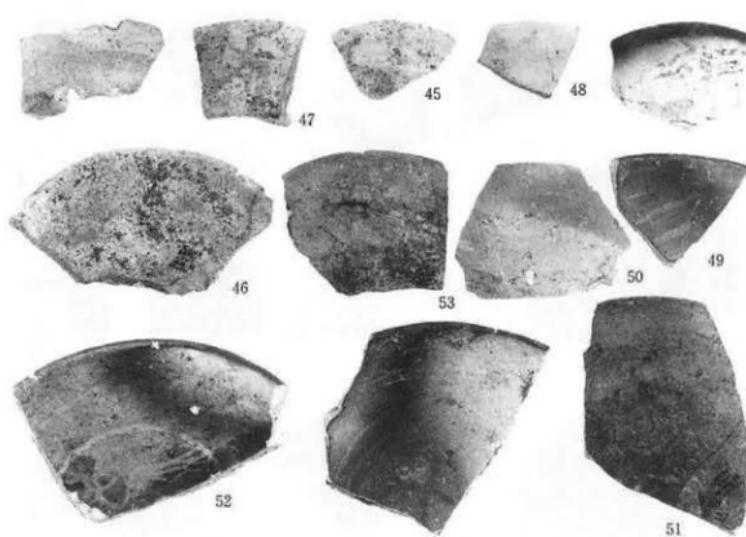


土坑5内出土土器

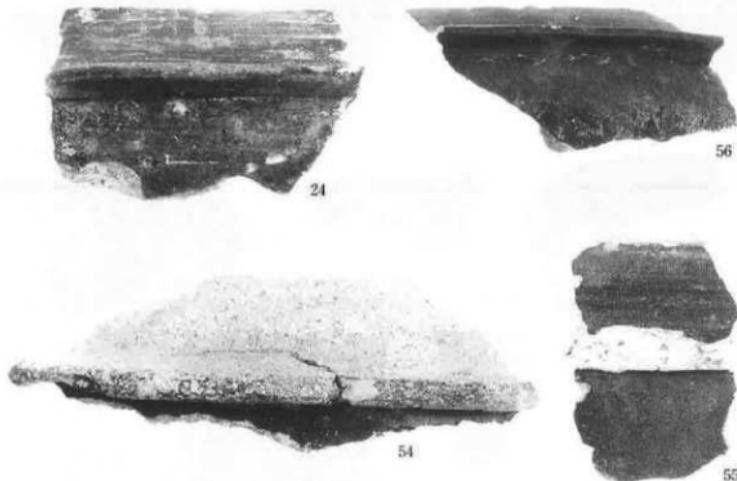


その他の遺構内出土土器

圖版5 小若江遺跡第4次調查  
遺構

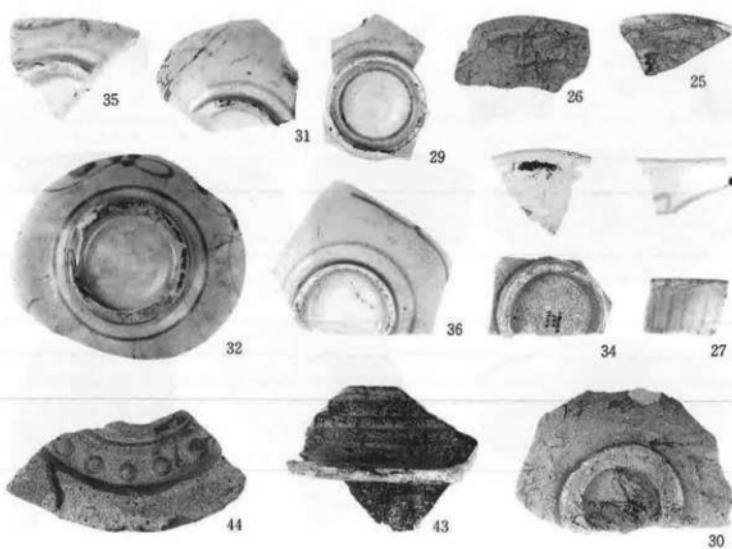


包含層內出土土師器・瓦器

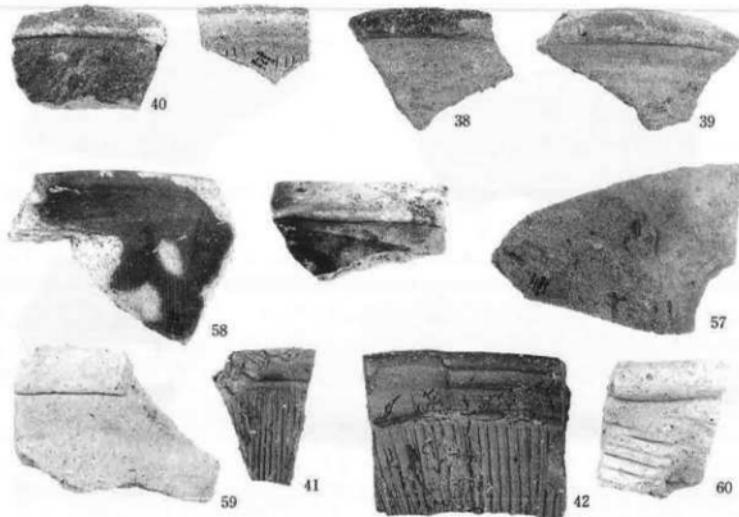


土師器・瓦質土器 羽釜

圖版6 小若江遺跡第4次調查  
遺構



包含層內出土遺物



包含層內出土土器·陶器

## 第4章 瓜生堂遺跡第48次発掘調査

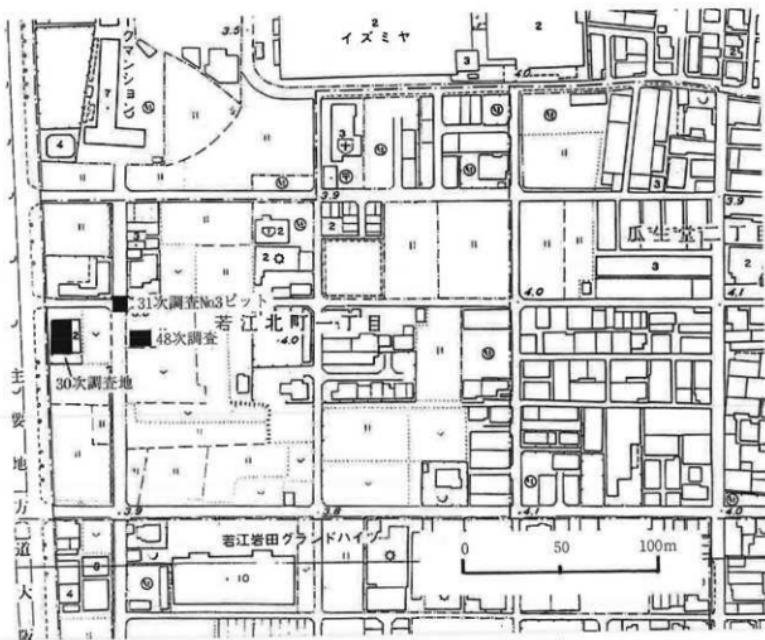
### 1)はじめに

平成9年8月8日、市内に居住する個人から、東大阪市若江北町1丁目38番地において、共同住宅を建設する旨の埋蔵文化財発掘届出が東大阪市教育委員会(以下、「市教委」と略す)に提出された。当該地は周知の瓜生堂遺跡の範囲に当り、当該工事の実施により埋蔵文化財に影響が及ぶことが予想されたため、市教委では工事実施に先立ち試掘調査が必要と判断、届出者にその旨通知した。

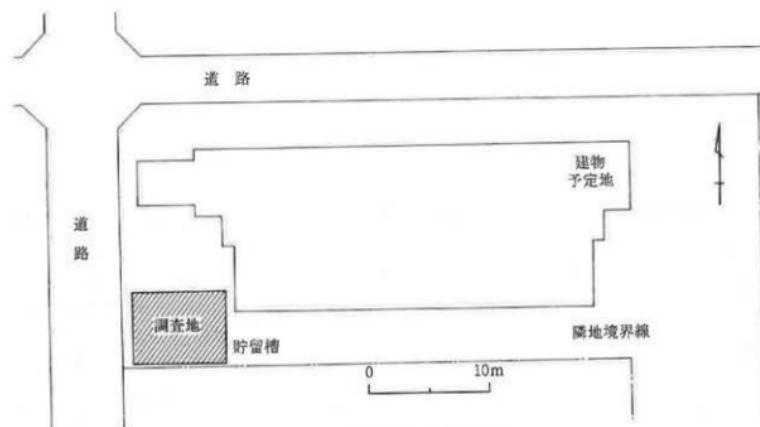
平成9年8月29日の試掘調査の結果、現地表-1.3~1.6mの旧耕土直下で層厚20cm、土師器・須恵器を含む歴史時代の土層を確認した。このため、埋蔵文化財の取扱いを巡り協議に入るはずであったが、届出者側から建設工事着手を当分の間見合わせる旨の回答があり、旬日を経過した。平成11年9月28日、同前の届出者から当該地において、別設計の共同住宅建設にかかる届出があった。今回の工事計画では、予定の共同住宅の基礎掘削は現地表から-0.84mで、地下の埋蔵文化財には影響が及ばないことが判明し、掘削の深い貯留槽予定地のみを調査対象として双方合意した。発掘調査は平成11年10月18日から10月21日までの4日間実施した。調査面積は約46m<sup>2</sup>である。

さて、瓜生堂遺跡は、現在まで47次にのぼる発掘調査が実施されている。調査成果については、既に原田修「瓜生堂遺跡の調査」〔(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度、1989年。〕、濱田延充「瓜生堂遺跡の調査成果」〔大阪の弥生遺跡Ⅰ、大阪の弥生遺跡検討会、1997年。〕によって総括されている。ここでは、濱田の調査成果に拠りながらも弥生期の遺跡の推移を見ていくことにしたい。瓜生堂遺跡の範囲に集落が出現するのは前期後半の段階であるが、該期の集落は空間的に広がりを持たないようである。中期中葉から後期初頭まで、瓜生堂遺跡では居住域・墓域が空間的に展開される。歴史の教科書にも記載されるほど著名な「第2号方形周溝墓」をはじめとする方形周溝墓の墓域は三つのゾーンでグルーピングが可能となっている。「第2号方形周溝墓」は、木棺6・甕棺5・土坑墓6の主体部を持ち、木棺内に遺存した人骨の分析から、3代にわたる家族墓との推定がなされている〔「瓜生堂遺跡」大塚初重他編「日本古代遺跡事典」、吉川弘文館、1995年。〕。後期中葉には集落に関連する遺構は認められず、当遺跡周辺は水田域となるようである。

一方、48次調査地周辺では、奈良～平安時代の集落が部分的に見つかっており注目される。府道中央環状線内で行われた財團法人大阪文化財センター(当時)の調査〔大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター「瓜生堂」、1980年。大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター「河内平野遺跡群の動態Ⅳ」、1998年。〕では、B地区から8世紀代の掘立柱建物群が検出され、C地区北端の落ち込みから8世紀代の多量の遺物が出土した。出土遺物には土師器壺・高壺・壺・羽釜・甕・須恵器蓋・壺・壺・甕などが見られる。48次調査の北、31次調査(下水道5工区管渠築造工事に伴う調査)のNo3ピット〔原田修他「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」〔(財)東大阪市文化財協会年報1988年度、1989年。〕〕でも、第3層が奈良～鎌倉時代の遺物包含層となり、第4層上面で9世紀代の溝が発見されている。この溝からは土師器壺・壺・壺・甕・須恵器壺・蓋・平瓶が出土した。西約30mの30次調査地〔「瓜生堂遺跡の調査」〔(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度、1989年。〕〕では二次的な整地土層から古墳時代に属する滑石製子持勾玉が出土したほか、奈良～平安時代の遺物が比較的まとまって検出された。また、「若」の銘を持つ墨書き土器も瓜生堂遺跡内から発見されている〔瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡Ⅱ」、1973年。〕。これら該期の遺構・遺物は、瓜生堂遺跡本体のみで理解するより、むしろ南方に広がる若江遺跡のうち、その存在が推定されている若江郡衙との関わりを重視する考えがあり、その蓋然性は高いものと思われる。



第1図 瓜生堂遺跡第48次調査地と周辺の調査



第2図 調査トレンチ位置図

## 2) 位置と環境

瓜生堂遺跡は、東大阪市の中央部に位置する。町名では、瓜生堂・若江北町・若江西新町に広がる。遺跡の時期は弥生時代から中世期まで及び、断続的に集落が営まれたことが明らかになっている。範囲は、大阪府寝屋川流域南部下水道小阪ポンプ場を中心に、南北約1000m、東西約750mにわたり、現在の標高で約5mに遺跡が広がっている。

これまでの調査成果で、瓜生堂遺跡は旧大和川が形成した三角州上に立地することが判られている。河内平野の形成には、旧大和川が運搬する土砂の堆積が大きく関与する。農耕集落の成立条件として、自然堤防や微高地が選択されたことは必然といえよう。しかも、一層の堆積により、平野以前に存在した河内湖・河内湖の入江を呈する古地形に徐々に自然堤防が構築されると、それは耕作可能地の拡大をもたらすことに帰結する。このような自然環境の変移を契機に、河内湖縁辺に瓜生堂・鬼虎川という河内地方を代表する拠点集落が弥生時代中期に現出すると考えられよう。なお、これらの平野形成为至る古地形・古環境研究については、松田順一郎氏の一連の著作に掲げたい【例えば、「大阪府瓜生堂遺跡における弥生時代の河川地形発達と遺構形成過程」「大阪の弥生遺跡Ⅰ」など】。

瓜生堂遺跡の北には西岩田遺跡、南には巨摩寺遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡が連続と続き、平野部での弥生～古墳時代の遺跡密集地を形成する。また、瓜生堂遺跡は、郡衙・古代寺院・守護所・城砦などが存在したとされる若江遺跡と指呼の間にあり、遺跡の周辺は、本市中央部にあって、華やかに彩られた歴史的環境を有する一帯となっている。



第3図 瓜生堂遺跡とその周辺の遺跡

### 3) 層位

今回確認した層位は以下のとおりである(第4図)。なお、調査掘削は文化財保護の観点から、計画工事の貯留槽床面までを確認したにとどまる。

第1層 10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルト。層厚15~22cm。近代~現代の耕作土である。

第2層 10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルト質粘土。マンガン粒を多量に含む。細粒砂をレンズ状に含む。層厚13~30cm。近代の耕作土である。

第3層 7.5YR4/4褐色粗粒砂混じり極細粒砂。マンガン粒を多量に含む。層厚5~7cm。

第4層 5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂混じりシルト。細粒砂をレンズ状に含む。層厚25~40cm。近世の染付碗や瓦片とともに二次堆積で古墳~奈良時代の須恵器・土師器がみられた。

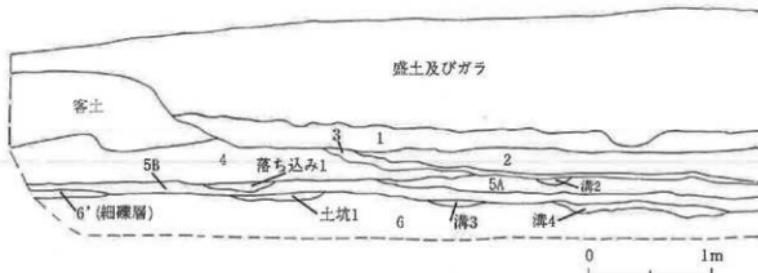
第5層 古墳~鎌倉時代の遺物包含層。土質の相違によって2層に区分できた。層厚21~24cm。

第5A層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土混じりシルト。マンガン粒・粗流砂を多量に含む。

第5B層 N5/灰色シルト質粘土と10YR3/3暗褐色極細粒砂の混合土。堅く締まっている。

第5A層・第5B層の上面は近世期の遺構面をなしている。

第6層 2.5Y6/1黄灰色極粗粒砂~細礫を主体とする砂礫層。中粒砂・粗粒砂・粗粒砂~極粗粒砂・中粒砂~粗粒砂・細礫・極粗流砂の各レンズ状のブロックが認められた。層厚37cm以上。第6層の上面は古墳~奈良時代の遺構面をなしている。



第4図 土層断面図

### 4) 検出した遺構

#### 遺構面I(第5図)

5A層・5B層上面で溝2条、落ち込み1箇所を検出した。全て近世期の所産である。

溝1 トレンチ北側に位置する。溝底面のレベル差から、南西から北東へ流下したものと考えられる。断面はU字形を呈する。幅38~56cm、深さ12cmを測る。埋土は7.5YR4/1褐灰色極粗粒砂混じり粘土質シルト。出土遺物には土師器・須恵器のほか、近世陶磁器が見られた。

溝2 トレンチ南西端に位置。底面のレベルは北へ傾斜している。現存長1.1m、幅34~42cm、深さ11cmを測る。埋土は溝1と同じ。出土遺物には、土師器・須恵器・近世瓦がある。

落ち込み1 トレンチ南側に位置。円形を呈する。現存径1.0m、深さ7cm。埋土は10YR4/6褐色粗粒砂混じり粘土。出土遺物は土師器・須恵器であった。

### 遺構面II(第6図)

6層上面で溝4条・土坑3基・ピット18個を検出した。これらの遺構は、出土遺物の年代観から、奈良時代の所産と考えられる。埋土は全て同一で、2.5Y4/1黄灰色極粗粒砂混じりシルトであった。

溝3 トレーンチ南側に位置。底面のレベル差から、東から西へ流下したものと考えられる。遺構面IIで検出した溝の流向は全て同一である。幅40cm、深さ4cmを測る。

溝4 中央で検出。中途で南肩が膨らむ。幅56~77cm、深さ9cm。

溝5 中央で検出。一部溝4と接する。幅12~35cm、深さ5cm。

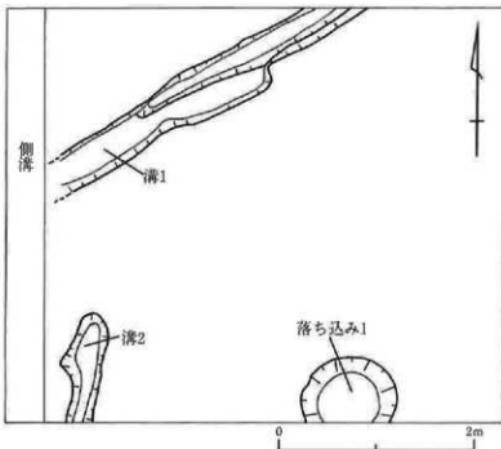
溝6 北側で検出。2本の溝が中途で合流した形状をとる。溝群の中では出土遺物は多い。合流部で幅75cm、深さ7cm。

土坑1 一部を検出。現存長1.0m、深さ8cm。

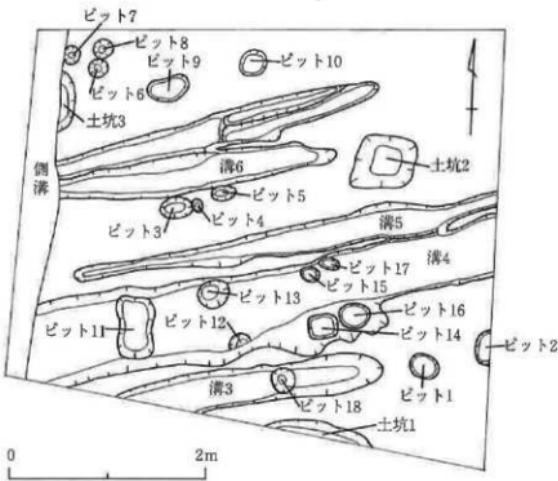
土坑2 方形を呈する。一边0.6m、深さ15cm。

土坑3 一部を検出。現存長0.6m、深さ8cm。

ピット 円形・椭円形・方形・菱形がある。遺存状態は悪く深さは3~5cm。柱通りは復元できない。



第5図 遺構面I 略測図



第6図 遺構面II 実測図

## 5) 出土遺物

今回の調査では、コンテナで約8箱分の遺物が出土した。所属時期では古墳時代に属するものが大半を占めるが、出土層位は1~4層で近代の二次堆積と考えられるため、該層の遺物は全て省略に付した。遺構・遺物包含層内の遺物のみ図示した。なお出土量に反して、接合資料がほとんど見られないのも特徴である。そこで破片から復元の法量の記載も一部を除き行わないこととする。

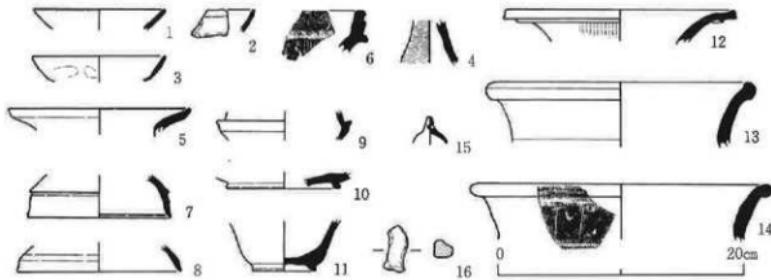
1~3は土師器皿である。3の体部下半外面は軽いユビオサエで、ヨコナデが施される口縁部との境が屈曲する。口縁部端面には強いナデが見られる。1・3は5層、2は溝1出土。4は高坏脚部で脚柱部外面に強いヨコナデが遺存する。5は壺の破片で古墳時代に属するもの。いずれも5層出土。6は壺前焼の擂鉢の口縁部。外面には棒状工具による沈線が2条施される。近世期。溝1出土。

7・8は須恵器坏蓋である。7の天井部と口縁部を分ける稜は短く、鋭さに欠ける。口縁部先端は丸い。5層出土。8では稜は見られず、体部と口縁部との境がわずかに凹む。溝6出土。9は受部をもつ壺身の体部片。受部は外上方へ伸びるが、端部の稜は丸くおさめる。ビット11出土。10は高台の付く壺Bの底部。5層出土。11は壺Lの底部片。外面とも回転ナデが施される。奈良時代後半か。溝6出土。12は壺の口縁部である。頭部から屈曲後、大きく開いて端部で水平近く伸び屈曲する。内端面は上方につまみあげ面をなす。5層出土。13は壺の口縁部である。ゆるやかに外反し、端部は屈曲させて丸く仕上げられている。口縁部内面には凹線が見られる。全体に風化が著しい。5層出土。14は壺の口縁部と見られる。立ち上がり気味に開いて、端部で外折後丸く肥厚させている。頭部外面にヘラによる縱直線掛けが現状で2条認められる。5層出土。

15は土鉢である。上端の突起部中央に孔を穿つ。外面は7.5Y8/1灰白色を呈する。5層出土。16は獸脚円筒視の獸脚である。現状で全長3.8cm、最大径で1.5cmを測る。獸脚前方以外の3面はすべて面取りされている。獸脚部先端は欠損しているが、大きく踏ん張る形態と思われる。獸脚部内面は丸く膨らむ。5層出土。他に製塙土器(図版3)も出土している。

## 6)まとめ

今回の調査では、遺構面を2枚確認した。溝1出土の壺前焼擂鉢(6)は江戸時代に下る資料と考えられ、遺構面Iの時期も該期に措定できる。遺構面IIは時期の限定できる資料が少ないが、中世期の遺物は混入していない。古墳時代遺物が主体であるが、比較的遺物量の多い溝6から須恵器壺底部(11)が出土していることから、奈良時代に下ることが推測される。今後の調査伸展を期待したい。

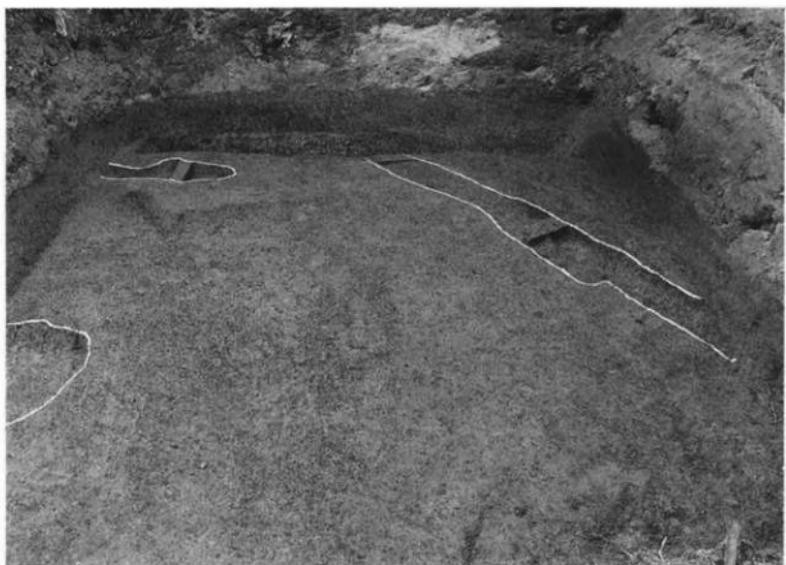


第7図 出土遺物実測図

図版1 瓜生堂遺跡第48次調査

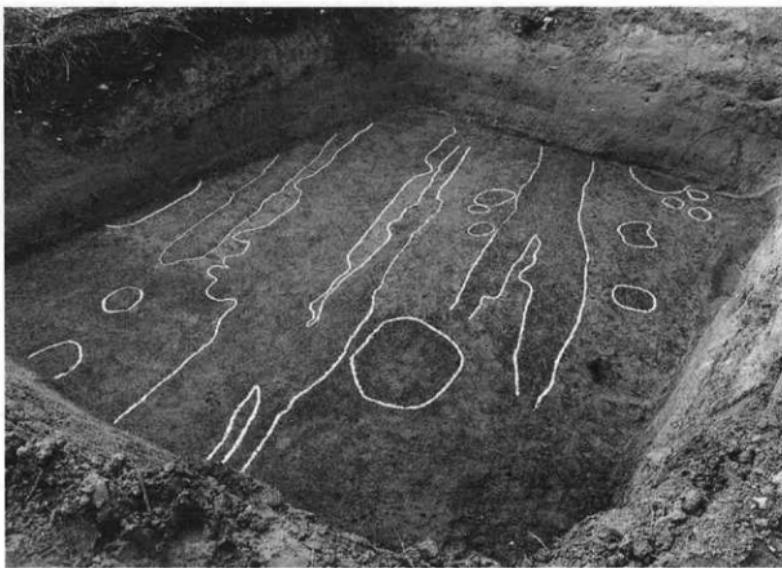


調査前の状況



遺構面I溝他掘削後状況

図版2 瓜生堂遺跡第48次調査  
遺構



遺構面II 溝・ピット他検出状況



遺構面II 溝・ピット他掘削後状況

圖版3 瓜生堂遺跡第48次調查  
遺構・遺物



土層断面



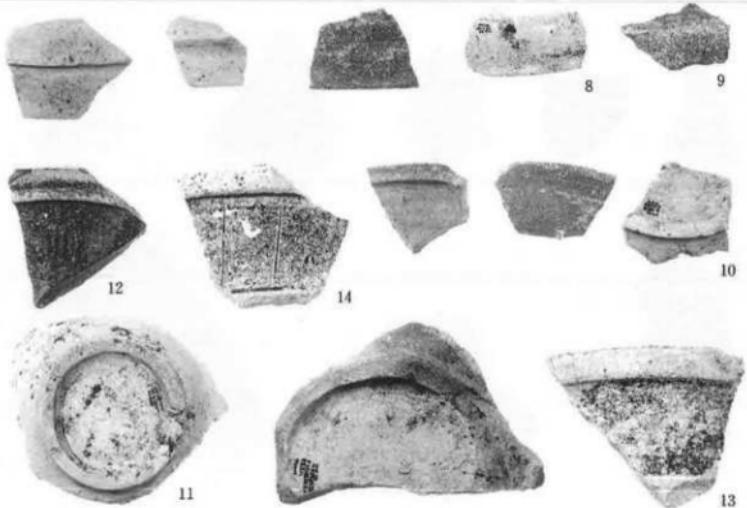
製塙土器・土鈴・円面覗獸脚他

圖版4 瓜生堂遺跡第48次調查

遺物



遺構內出土土器



包含層內出土土器

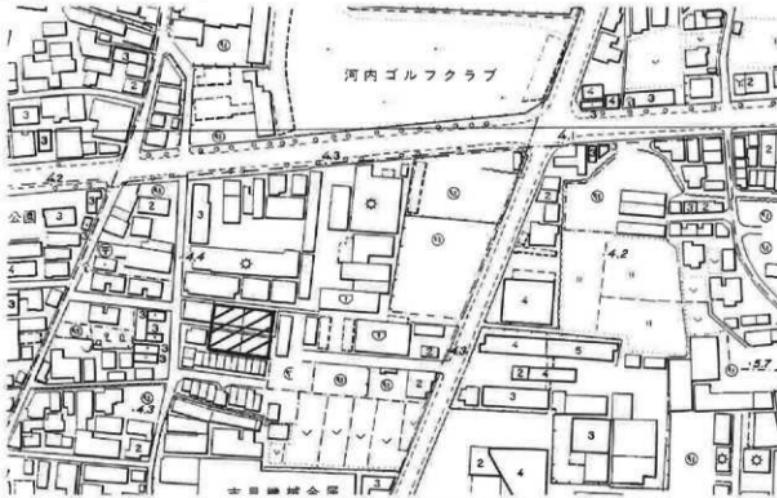
## 第5章 若江遺跡第76次発掘調査報告

### 1) はじめに

平成11年7月19日付けを以て、石田順一氏より文化財保護法にもとづき「埋蔵文化財発掘の届出」があった。市教育委員会文化財課では、工事予定地が周知の若江遺跡の範囲内にあたるため、試掘調査が必要であると判断した。届出者の依頼にもとづいて、平成11年8月4日に試掘調査を実施したところ、2箇所の試掘調査レンチのいずれからも遺物包含層が検出された。その後、文化財の取り扱いについて事業主及び施工業者と協議を重ねた結果、建物基礎工事によって破壊される地点を対象として、東大阪市直営事業（国庫補助事業）で発掘調査を実施することとなった。

若江遺跡は、弥生時代から中世期まで連続してつく複合遺跡である。若江遺跡の調査は、現在までに、75次調査が実施されている。これまでの調査結果をまとめてみると、弥生時代の遺構は、若江小学校南側の下水道工事に伴う調査で、弥生時代後期の水田の畦畔が検出されている。その後、弥生時代の遺構の上には砂層が厚く堆積している地点があり、砂層内から古墳時代の土器が出土している。弥生時代末から古墳時代にかけて、洪水などで大量の土砂が運ばれていた様子がうかがわれる。

奈良時代には、若江鏡神社境内を中心とする一帯の発掘調査で瓦が大量に出土している。出土する瓦は、飛鳥時代後期から奈良・平安・鎌倉時代にまたがって出土している。文献などからこの付近に若江寺が存在していたと考えられているが、寺の遺構は発見されていない。中世期に築造された若江城の造成工事によって破壊された可能性が考えられている。若江城は、市立若江幼稚園の敷地を中心にして、築造された。城は、1390年頃に守護代遊佐氏の本拠として築造され、畠山氏の家督争いに端を発した応仁の乱の舞台にもなった。その後、織田信長が石山本願寺攻めの拠点としたことがわかっているが、1581年頃には廢城となっていたと考えられている。若江遺跡の範囲内には各時代の遺構が重複していると思われる。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)

今回の調査地点は、東大阪市若江南町1丁目644-1番地にあたり、104m<sup>2</sup>を対象として、平成11年9月7日から9月30日まで現場調査を実施した。

### 2) 第1トレンチ

建築工事予定地の南側で東西方向に幅2m、長さ27mで設定した。基本層序は、以下のとおりである。

盛土 厚さ約90cmで調査地全域に真砂土によって盛土が行われていた。機械掘削により除去する。

第1層 耕作土。厚さ10~20cm。

第2層 青灰色粘質シルト。厚さ15~20cm。トレンチ東側で第2層上面より切り込んだ溝を検出した。室町時代末~近世の遺構と考えられる。

第3層 灰色細礫~中粒砂。厚さ約20cm。3層上面が中世の遺構面と考えられるが、第1トレンチでは中世の遺物は少なく、奈良~平安時代の遺物が出土している。

第4-A層 淡黄灰褐色シルト~細粒砂。黒色細礫~細砂。トレンチ東側で検出。厚さ約10cm。奈良~平安時代の遺物が出土している。

第4-B層 オリーブ黒色粘土。厚さ15~20cm。奈良~平安時代の土器に混じって古墳時代の土器が出土している。

第5-A層 オリーブ黒色粘土。厚さ10cm。この直上で銭貨(隆平永寶)1点出土。

第5-B層 灰白色細砂、炭混じり。厚さ10cm。古墳時代の土器少量出土。

第5-C層 黄褐色~オリーブ褐色シルト~細砂。厚さ20~30cm。古墳時代のベース面と考えられるが遺構などは確認できず、本トレンチでは遺物は出土していない。

イ層 黒褐色シルト質細砂~粘質土。

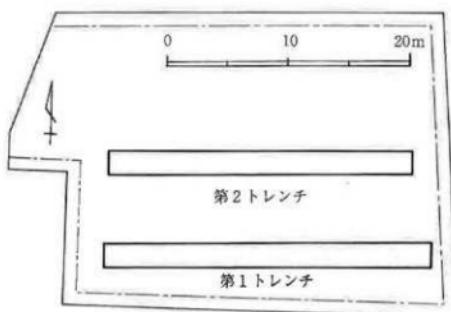
ロ層 黒色粘土と黄褐色粘土のブロック土混じり。

ハ層 褐色細礫~極細砂。自然流路内の堆積土。

溝1

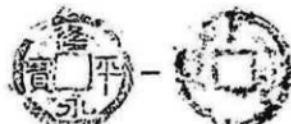
第2層直上で検出した。溝は、幅5.2m~3.3m、深さ0.5~0.7mを測る。検出した層位から室町時代末から近世に属する遺構と考えられる。第2トレンチでも痕跡程度の溝が確認できているので、南北方向に延びる水路状の遺構と考えておきたい。溝内の堆積土は埋め土と考えられ、この付近が水田に造成される時期に埋め立てられたものと思われる。

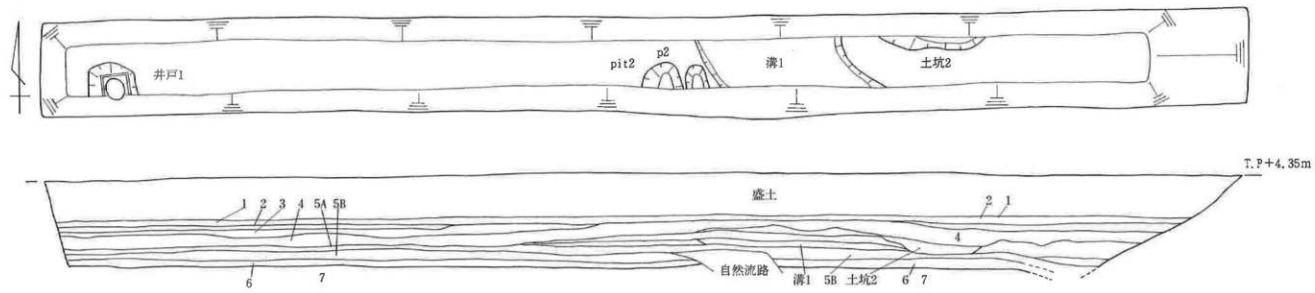
出土遺物としては、中世期の瓦器・土師器少量出土。奈良~平安時代の遺物が多く認められ、第5-A層の直上で、皇朝十二銭の第4番目鑄造の銭貨(隆平永寶、延暦15年-796-)が出土している他、第5層中より古墳時代(布留式期)の土器がまとめて出土している。



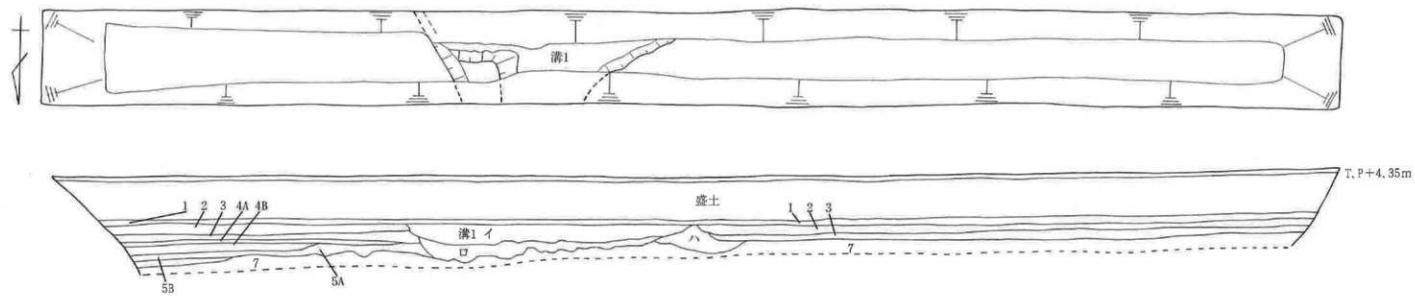
第2図 トレンチ位置図

第3図 銭貨拓影(1/1)





第4図 第2トレンチ平面・断面実測図



第5図 第1トレンチ平面・断面実測図

### 3) 第2トレント

第1トレントの北側約6m地点に幅2m、長さ25mの規模で設定した。層序は、以下のとおりである。

盛土 厚さ約90cm。真砂土。機械掘削により除去。

第1層 耕作土。厚さ10~15cm。

第2層 青灰色シルト~粘土。厚さ10cm。

第3層 暗オリーブ灰色細礫~極細砂。厚さ10~20cm。井戸1が第3層上面から切り込んでおり、中世期(12世紀頃)のベース面と考えられる。

第4層 暗灰色極細砂~シルト。厚さ20~30cm。トレント中央部分では第2・3層が認められず、第1層直下で検出され、古墳時代(布留式期)の土器が奈良~平安時代の土器に混じって出土している。特にトレント東側では、甕など一括資料が出土している。

第5-A層 青灰色極細砂~シルト。厚さ10~20cm。第4層下部・第5層上面で土坑2、ピット1・2、溝1を検出した。溝1の輪郭は明瞭でなく、もう少し上層から掘り込まれたと考えたほうがよい。土坑2、ピット1・2内より土師器片が少量出土しているのみで、時期を特定できないが、古墳時代に属する可能性が高いと思われる。

第5-B層 暗オリーブ色粘土。厚さ20~30cm。弥生時代後期の土器を含む。

第6層 黒色粘土。厚さ約15cm。弥生時代後期のベース面と考えられるが、遺構は検出できなかった。6層内より弥生土器が少量出土した。

第7層 灰オリーブ色粘土。無遺物。トレント東側で自然流路により切られている。

#### 井戸1

トレント西端で検出した。第3層(旧耕作土下約30cm)直上より切り込んでいる。一边約1.3mの方形の掘り方内に、上層は一辺約60cmの方形の木枠を組合せ、周囲を板材で囲んで井桁としている。下部は曲物を5段積み重ねて、井筒としており、深さは少なくとも1.2m以上であったものと考えられる。内部より瓦器碗、土師器皿が出土しており、12世紀代のものと考えられる。

#### 土坑2

長辺2.2m、深さ0.3mの楕円形状を呈し、トレント外に広がっているため全体の形状は不明である。古墳時代に属する。

#### ピット1・2

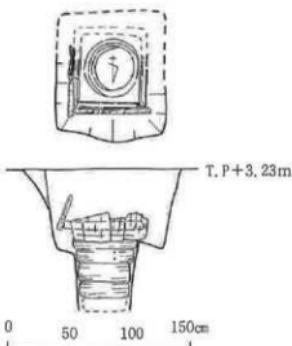
ピット1は、現状で長辺85cm、短辺50cm、深さ20cm。ピット2は、長辺50cm、短辺40cm、深さ15cmを測る。いずれも、トレント外に広がるため全体の形状は不明。古墳時代に属する。

第2トレントでは、中世期(12世紀頃)、奈良~平安時代、古墳時代(布留式期)、弥生時代(後期)の4時期の遺構及び遺物を確認した。

#### 4) 出土遺物

##### (井戸1内出土遺物)

土師器小皿2~4は凹凸を残す体部に口縁部を強くヨコナデを施している。5は白磁、6~10は瓦器碗。9は、口径15.85cm、器高6.35cm、底径6.15cmを測る。半球状を呈する体部は、内窓して立ち上



第6図 井戸1実測図

がり、口縁端部は丸く終わる。体部内外面は、ヘラミガキで調整し、特に内面の調整は密である。底部には、外方に広がる断面三角形のしっかりした高台が付く。和泉型I-3形式に属する。7は、大型の椀である。

(包含層内出土奈良～平安時代の遺物)

3層・4層からは、土師器碗(19・23)・杯A(11・25・29・32)・杯B(20・22)・杯C(17・18)・皿(2・24・28・30・33・36・37・44)・壺(13・15)・小型壺(38・42)・甕(16・35)・高杯(39・40)ミニチュア高杯(43)、須恵器杯A(27)・杯B(21・26・34)・皿(31)・高杯(41)、製塙土器(12・14)、瓦器皿(1)などが出土している他、平瓦片が数点出土している。特に12の製塙土器は、円筒形状の体部に口縁端部は、内窓気味に直口する。2～3cm大の石英・長石粒を多く含む粗い胎土で、表面は二次焼成のため赤みがかっている。

(包含層内出土弥生～古墳時代の遺物)

土師器壺(45)・小型丸底壺(68)・甕(46・47・49～52・54～56・59・61・62・64)・高杯(48・53・58・70)・器台(67・69)・弥生土器壺(63～66)・砥石(71)などが出土している。48・54・55・59～62の土器は、第2トレンチ第3層上面から一括出土している。古式の布留式土器の特徴を有している。64～65は、第2トレンチ6層直上から一括出土している。弥生時代後期前半に属すると考えられる。66は、体部に矢羽根状の叩き目が認められる。

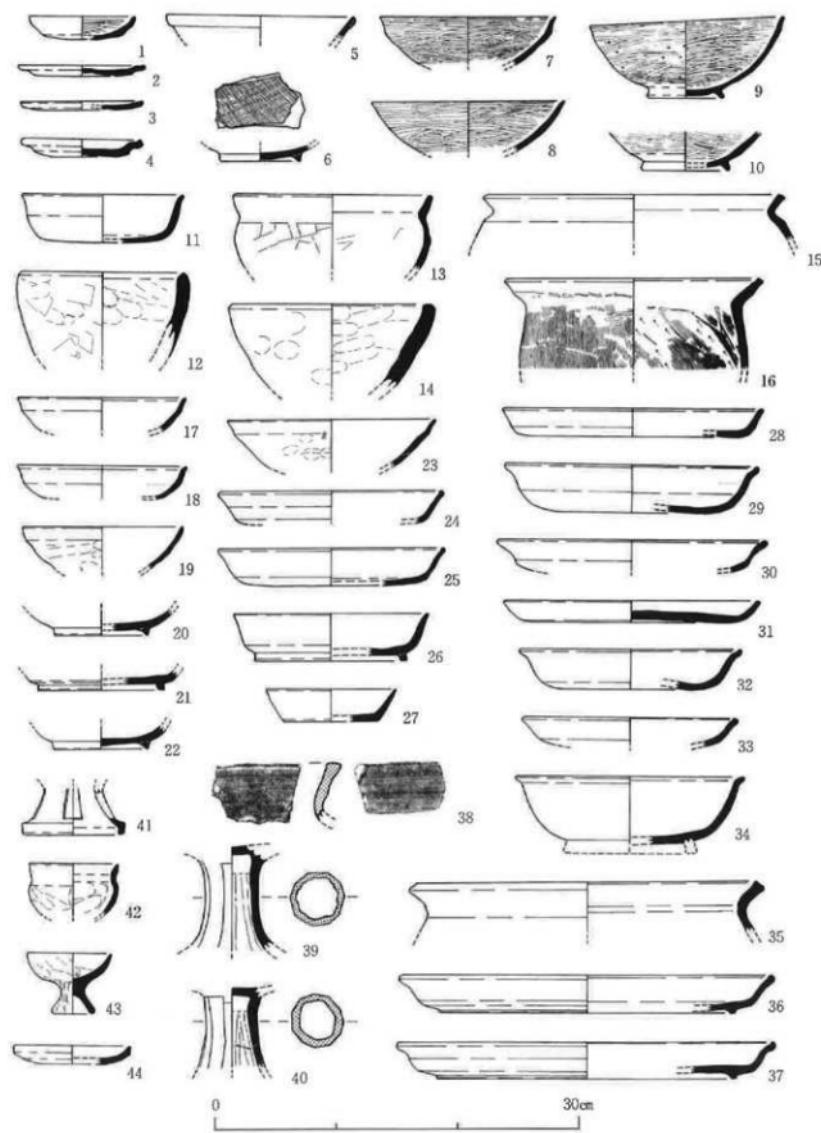
5)まとめ

今回の調査では、中世末～弥生時代まで、少なくとも4時期の遺構・遺物を検出した。調査範囲が狭小なため、遺構の広がり・性格までは明確にできなかたが、予想を含めてまとめておきたい。

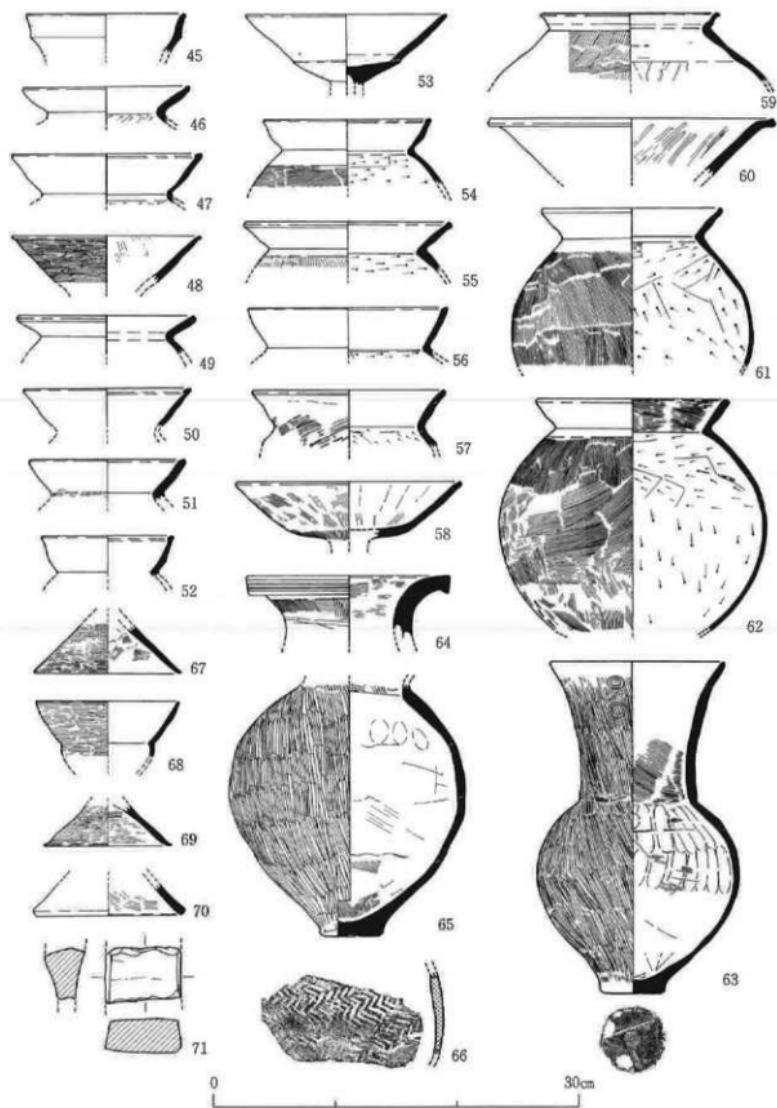
中世の遺構は、室町時代の終わり頃から近世にかけての水田などの開発により、削平されたと考えられ住居跡などは検出されなかったが、第2トレンチ西端で曲物井筒をもつ井戸1基を検出した。井戸内出土遺物より12世紀前半に属すると考えられ、この時期に周辺に集落があったと想像される。古墳時代の土器は、奈良～平安時代の包含層に混じって出土しているが、第2トレンチ東端では甕の一括資料が出土している。このことは、これらの包含層は、調査地の西側に統くことが予想される。

弥生時代の遺物も第2トレンチ東側に多く、若江小学校南側の調査地点で弥生時代後期の水田跡が発見されているが、この遺構と関連するものかもしれない。

最後に奈良～平安時代の遺物は、出土量が多く、今回の調査でコンテナ5箱分の土器類が出土しているが、半分はこの時期のものである。しかし、遺構は、小規模な土坑・ピットなどが検出されているのみで、遺構の性格・規模などは不明であるが、第1トレンチより皇朝十二銭の一つである「隆平永寶」1点が出土しているのが特筆される。



第7図 出土遺物実測図



第8図 出土遺物実測図

図版1  
若江遺跡  
遺構



圖版2  
若江遺跡  
遺構



1. 第1トレンチ銭貨出土状況

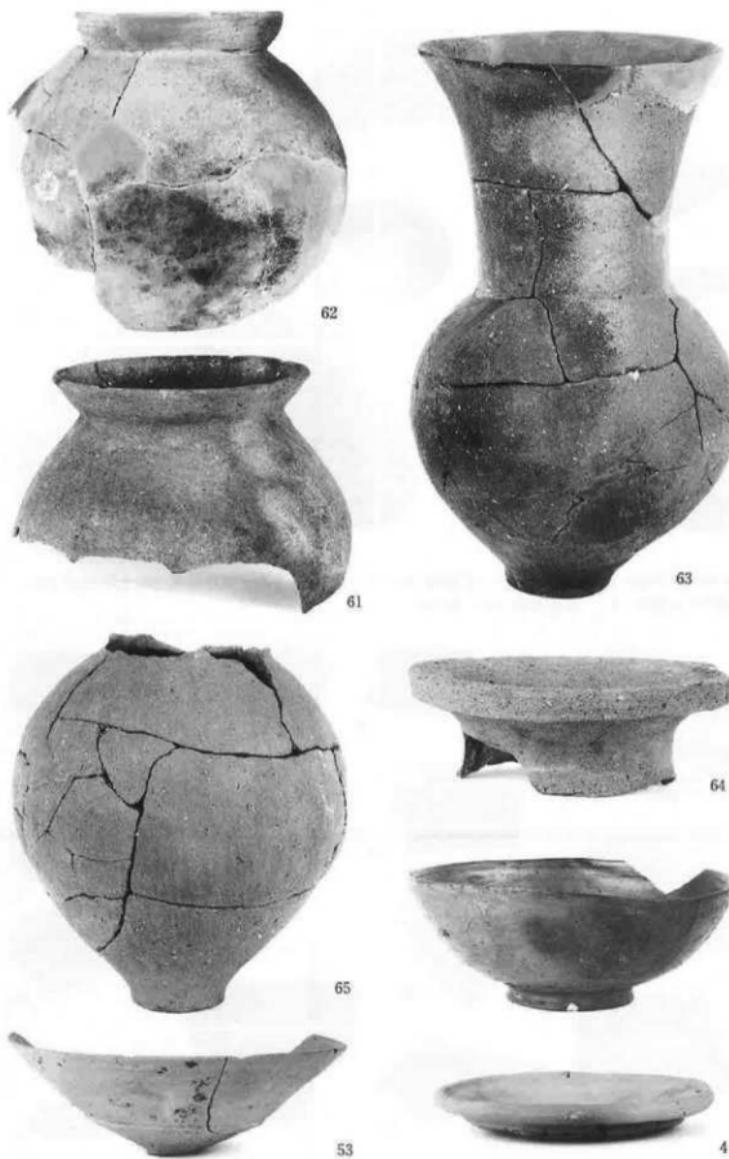


2. 第1トレンチ土師器出土状況



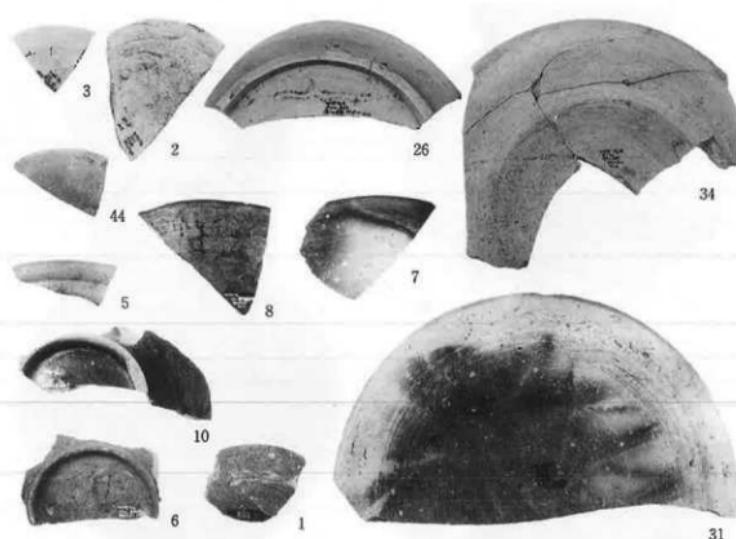
3. 第2トレンチ陶器出土状況

圖版3 若江遺跡 遺物

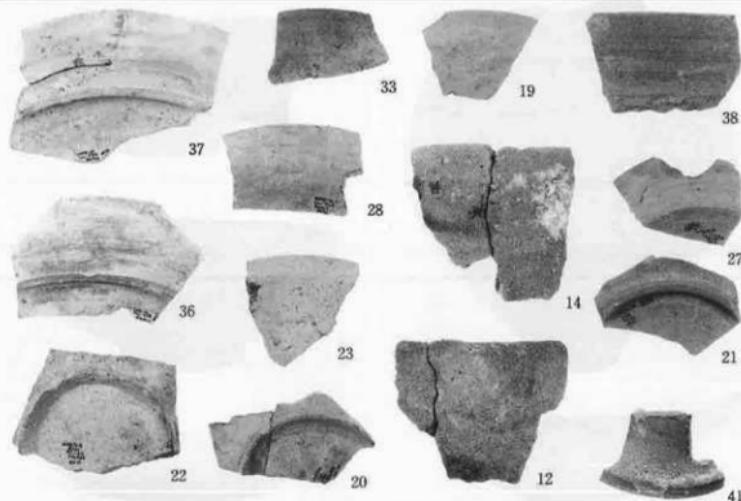


井戸1出土土師器小皿(4)、瓦器椀(9)、包含層出土土師器高杯(53)、土師器甕(61・62)、弥生土器壺(63~65)

圖版4  
若江遺跡  
遺物

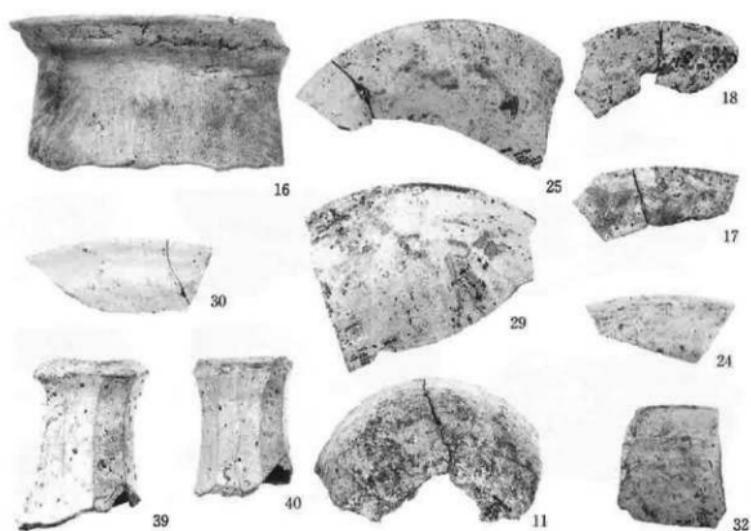


井戸1出土灯明皿(3)、白磁碗(5)、瓦器椀(6~8・10)、溝1出土須恵器皿(26)土師器皿(44)、  
包含層出土瓦器皿(1)、須恵器皿(31)、杯(34)

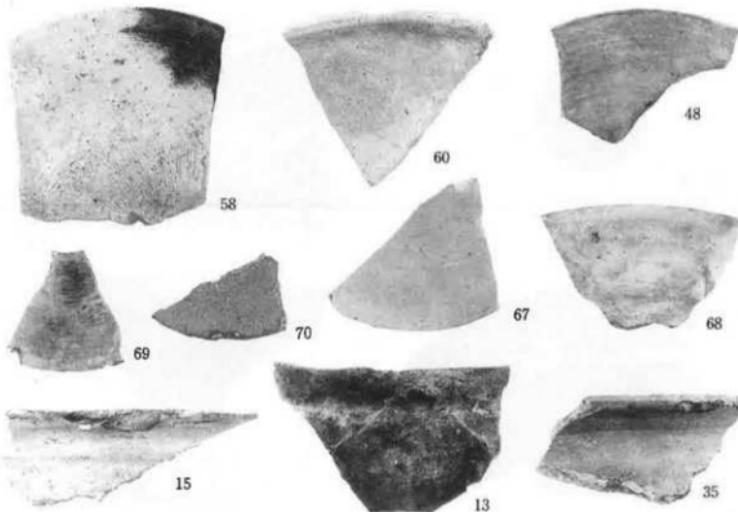


溝1出土土師器杯(20)、包含層出土土師器椀(19・23)、皿(22・28・33・36・37)、製塙土器(12・14)、  
須恵器杯(21・27)、甕(38)、高杯(41)

圖版5 若江遺跡 遺物

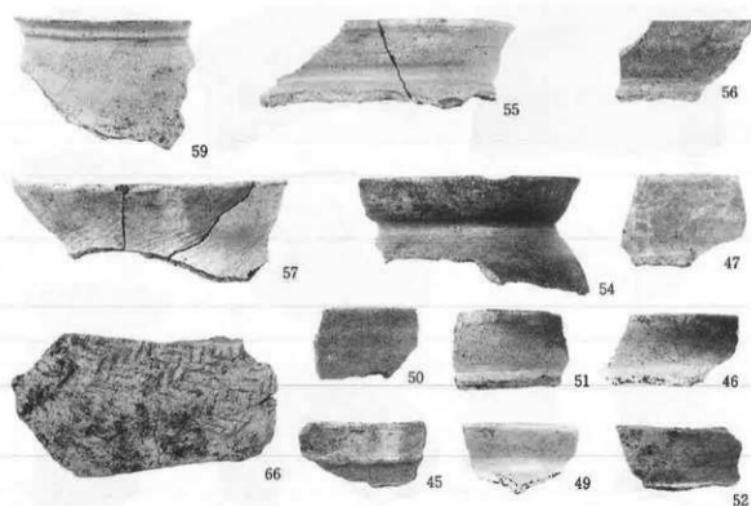


包含層出土土師器杯(11·17·18·25·29·32)、甕(16)、皿(24·30)、高杯(39·40)

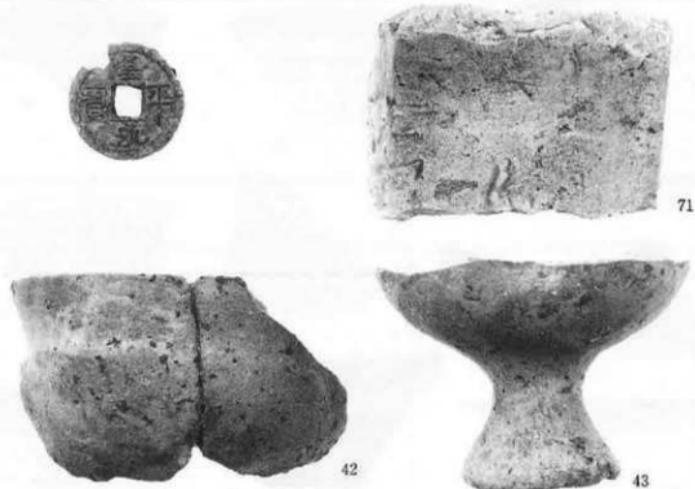


包含層出土甕(13·15)、甕(35)、高杯(48·58·60·70)、丸底甕(68)、器台(67·69)

図版6  
若江遺跡  
遺物



包含層出土土師器壺(45)、甕(46・47・49・50~52・54~57・59・66)



包含層出土土師器小型壺(42)、ミニチュア土器高杯(43)、砥石(71)、古錢

## 第6章 意岐部遺跡第4次調査概報

### 1)はじめに

平成11年3月5日付けを以て、奥野明氏より文化財保護法にもとづき「埋蔵文化財発掘の届出」があった。市教育委員会文化財課では、工事予定地が周知の意岐部遺跡の範囲内にあたるため、試掘調査が必要であると判断した。届出者の依頼にもとづいて、平成11年8月5日に試掘調査を実施したところ、2箇所の試掘トレーンチのいずれからも遺構・遺物が検出された。その後、文化財の取り扱いについて事業主及び施工業者と協議を重ねた結果、建物基礎工事及び駐車場建設により破壊される範囲を対象として発掘調査を実施することになった。調査対象範囲は250m<sup>2</sup>になり、「東大阪市埋蔵文化財緊急発掘調査補助金取り扱い要綱」により200m<sup>2</sup>分を国庫補助事業の対象とし、残り50m<sup>2</sup>分は事業主負担で実施することで合意し、平成11年度東大阪市直営事業として平成11年10月25日より12月9まで発掘調査を実施した。

遺跡は、府道大阪外環状線の東側、近鉄奈良線の北側に位置している。遺跡の南東側で西岩田遺跡と接し、周辺には新家遺跡、瓜生堂遺跡など弥生時代から營まれている集落が点在する。特に西岩田遺跡は、古墳時代前期の遺構が検出されているので、本遺跡との密接なつながりが考えられる。

意岐部遺跡では、これまでに3次の発掘調査が実施されている。第1次調査では古墳時代後期（6世紀）の溝・土坑などが検出された。第3次調査では、鎌倉時代の土坑・ピット、古墳時代後期の溝・土坑・ピットなどが検出された他、古墳時代前期の布留式期の土器が多く出土した。今回の調査地は、東大阪市御厨東町2丁目681-4番地に位置し、1次・3次調査地点の南側に位置しているので、遺構の広がりを確認することが期待される。



第1図 調査地位置図

調査は、掘削土の置場確保の必要から、調査地の西側と東側に分けて実施することにした。西側の南トレンチをA地区、北トレンチをB地区、東側全体をC地区と呼び、A・B地区から先行して実施し、終了後引き続いてC地区的調査を行なった。

#### 2) 基本層序

調査地全域の基本層序は、以下のとおりである。

盛土 厚さ約50~60cm。真砂土により全域に盛土が行なわれている。

第1層 旧表土。厚さ約10cmの耕作土。

第2層 黄褐色細礫混じりシルト。厚さ約20cm。床土で固くタタキしめられている。

第3層 灰色~暗褐色、細砂~細礫混じりシルト。厚さ約20cm。上面で溝1を検出。中世期の遺構面(第1期遺構面)。

第3-A層 黒褐色(2.5Y3/1)砂混じり砂質土。遺物を多量に含む。土坑、ピット、溝などの遺構検出(第2期遺構面)。厚さ15~25cm。平安時代の遺構面。

第4層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト~細砂。土坑、溝、ピットなどの遺構検出。(第3期遺構面)。厚さ15~30cm。平安時代の遺構面。

第5層 オリーブ黒色(5Y3/1)細礫~中粒砂。土坑、溝、ピット(柱材残存)などの遺構検出。(第4期遺構面)厚さ20~30cm。古墳時代の遺構面。

第6層 黄色砂層。無遺物層。

#### 3) A地区

調査地の南西地点に、南北約3.5m、東西約27.8mの規模で設定した。第3層上面で中世期に属すると思われる溝1(幅約50cm、深さ20cm、南北方向に約1.2m)を検出したほか、第4層で平安時代の溝2、ピット5箇所を検出した。特にP5内より内黒の土師器と焼石が出土しており、祭祀のために埋められたものと思われる。第5層直上で土坑1が検出されたが、調査地外へ広がることや後世の擾乱により、規模・性格などは不明。古墳時代に属する遺構と思われる。

#### 4) B地区

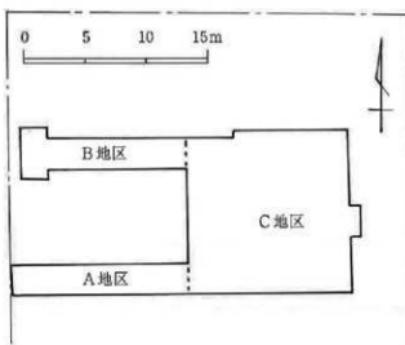
調査地の北西地点に、南北2.6m~4.3m、東西約13.5mの規模で設定した。後世の擾乱などにより、かなりの部分がすでに破壊されていた。

第4層上面で溝2、ピット6箇所確認したのみ。平安時代に属する遺構と思われる。

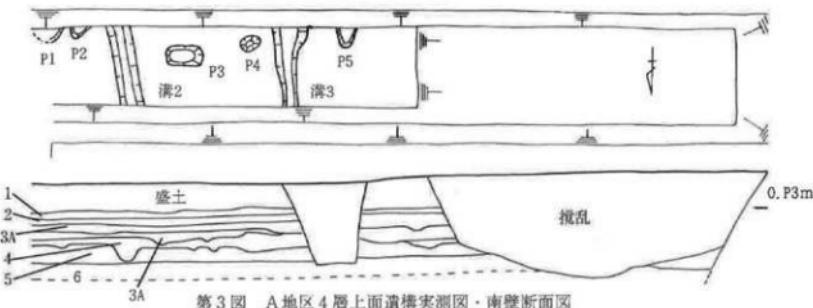
#### 5) C地区

調査地の東側半分を対象とし、南北13.4~12.8m、東西約15.3mの規模で設定した。第1~4遺構面を検出した。以下、遺構面ごとに記述をおこなう。

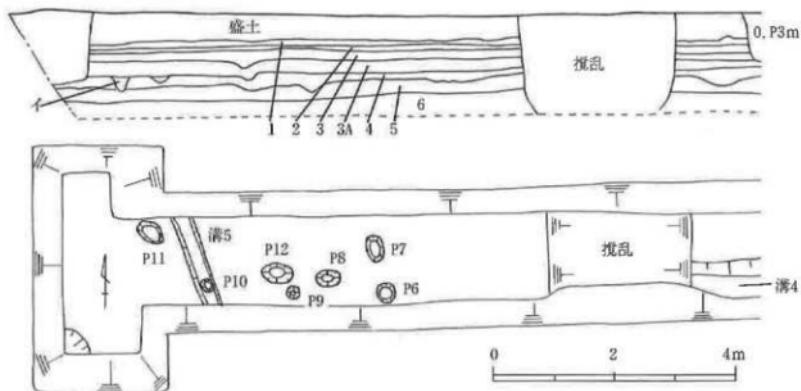
第1期遺構面(第3層上面)で、溝1箇所、土坑5箇所、ピット7箇所検出した。溝6は、C地区中央を幅約1.7m、深さ約0.3mで南北方向に検出した。溝は、2時期に分けて掘削されており、堆積土はブロック状の土が混じっており、埋め戻しが行なわれたものと考えられる。土坑4内より炭化物



第2図 調査地区位置図



第3図 A地区4層上面遺構実測図・南壁断面図



第4図 B地区4層上面遺構平面図・北壁断面図

が認められたほか、P 22内では、小型の須恵器壺も検出されている。第2期遺構面の検出遺構で、溝6は中世、P 22が平安時代に属すると思われ、平安時代～中世期の遺構が存在する。

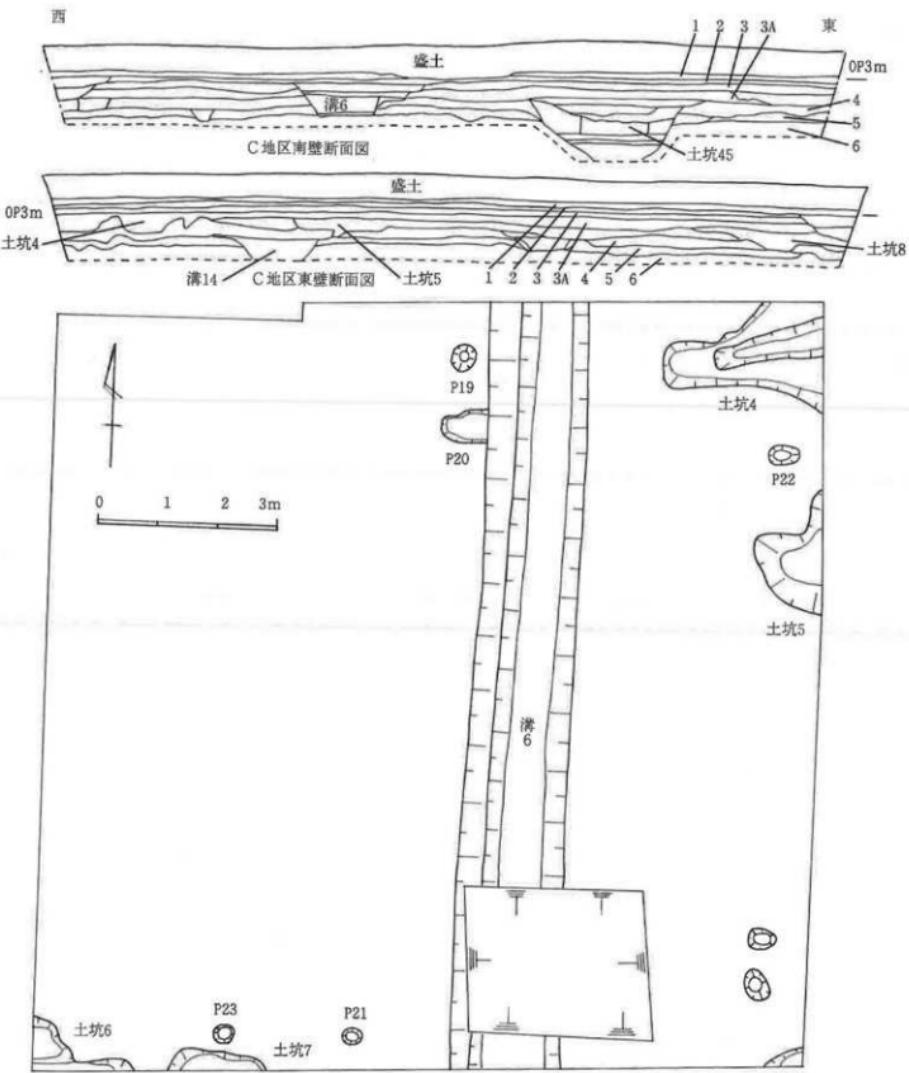
#### 第3期遺構面（第4層上面）

溝9、土坑16箇所以上、ピット15箇所以上を検出した。南北方向の溝7・溝8と、東西方向の溝10～13の遺構群に分けられる。平安時代に属する遺構である。

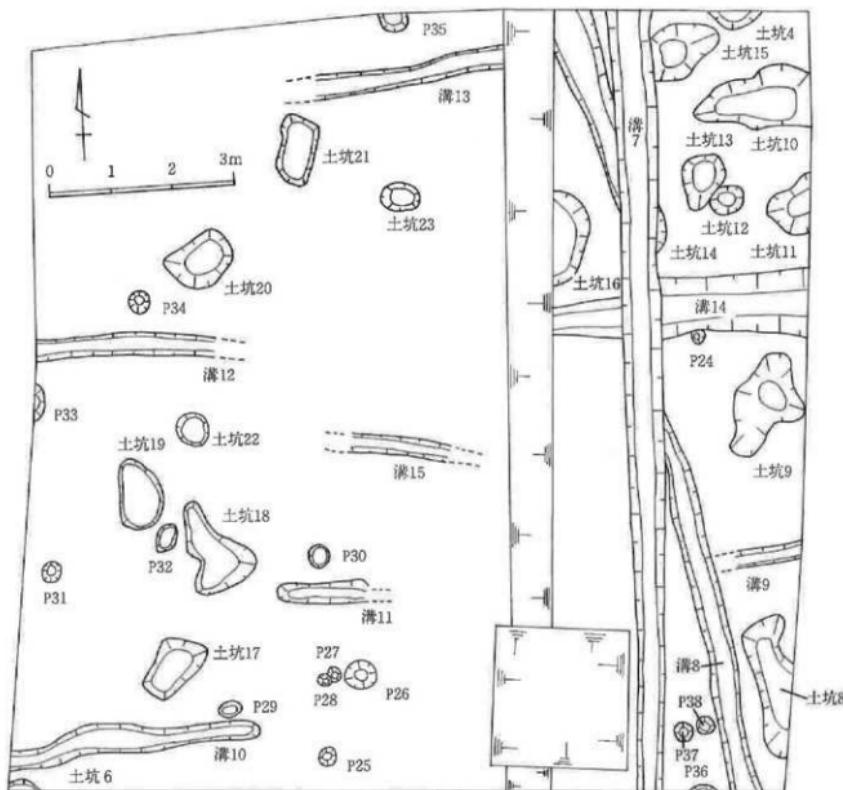
#### 第4期遺構面（第5層上面）

第4期の遺構面は、第5層の砂層上面につくられている。このため、遺構内には砂層の上に粘土ないし細礫などで整地した部分が認められる。

土坑45は、C地区南壁西端付近で発見されたもので、遺構はさらに南へ広がると思われる。現状で、直徑2.8mに円形状の掘り方内に1辺1.0mの方形の中央孔をもつ。第5～6層の砂層を切り込んでつくられた遺構であるため、掘り方内及び底面には、固くタタキしめた整地土が認められた。井戸状遺構と考えたが、井戸の痕跡を示すものは、何ら認められなかった。底部より土師器のカマド片の一部が出土している。



第5図 C地区3層上面遺構実測図



第6図 4層上面遺構実測図

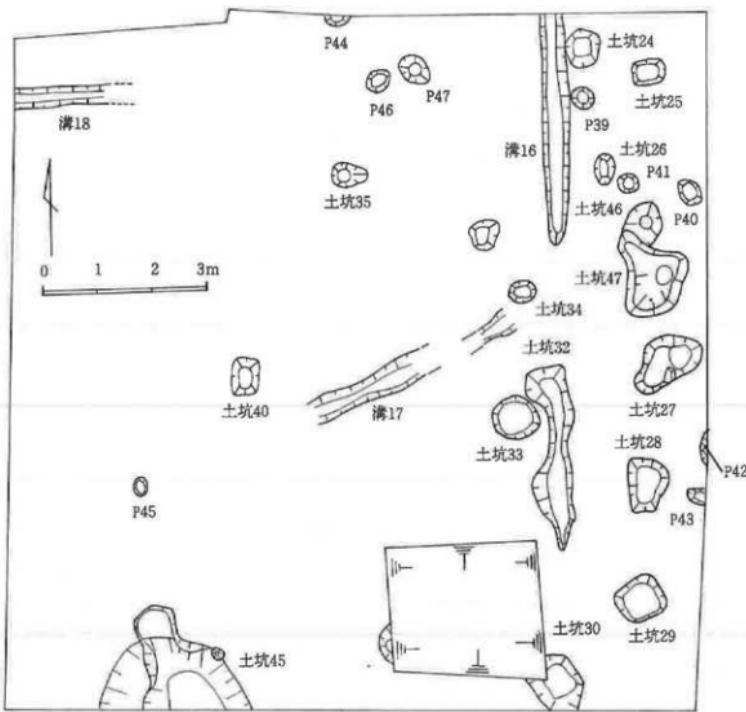
土坑30は、南壁の東端付近で検出した遺構で、長辺約1.1m、短辺0.9m、深さ0.6mを測る少し歪な長方形状を呈している。内部の堆積層は、1層暗オリーブ褐色粘質土、厚さ約20cm。2層灰オリーブ粘質シルト、厚さ約10~15cm。3層オリーブ色細砂、厚さ約10cm。4層暗灰色粘質シルト、厚さ約15~20cmを測り、3層内からは炭化物も出土している。堆積層は、貼り土を施したように平坦に整地されている。性格などは不明である。

土坑46は、土坑47により一部切り取られているが、現状で長辺80cm、短辺62cmの楕円形を呈し、内部に径20cmの円孔が見られる。円孔内部より柱材の一部と思われるものが出土していることから、この土坑は柱穴と考えられる。建物などを推測できる他の柱穴は現状では不明である。

#### 6) 出土遺物

##### 遺構内出土遺物

C地区土坑2~3層上面で確認。瓦器椀(4~5)、土師器皿(1~3)、瓦質足釜などが出土した。



第7図 C地区5層上面遺構実測図

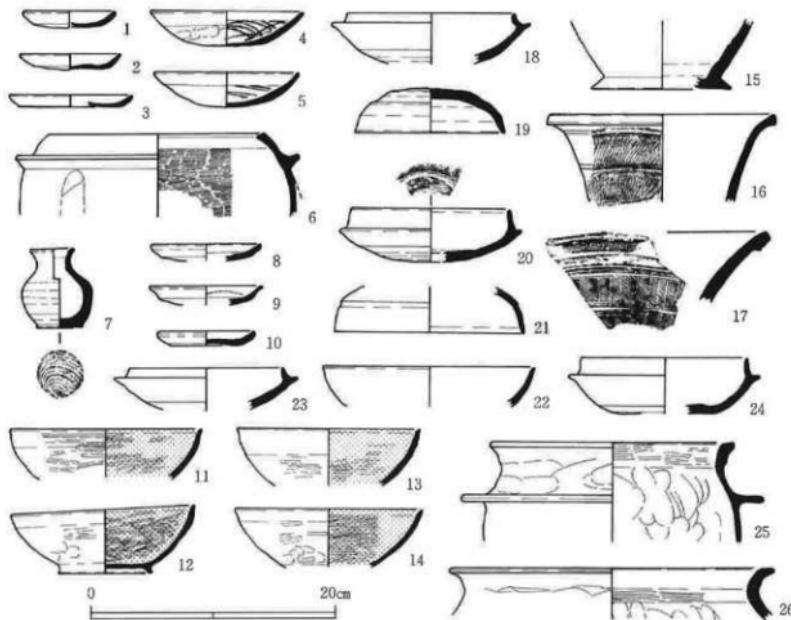
瓦器椀4・5は、丸底の底部に内弯する浅い体部が付き口縁部は丸く終わる。内面に粗い暗紋を施す。和泉型IV期に相当する。

A地区土坑1(15~17)土坑1は、A地区西端で検出したもので攪乱が多く規模など不明な点が多い。内部より須恵器大甕(17)・壺(15・16)などが出土しており、古墳時代以降の落ち込みである。

(B地区) P6(11~14・25・26)P6は、内部に土器・礫が重なって出土した。(11~14)は黒色土器椀で、(12)は口径17.5cm、底径7.4cm、器高5.2cmを測る。内面は丁寧なヘラミガキを施し、黒色に焼成し、外面はにぶい黄褐色を呈し、ナテ調整で仕上げている。畿内系Ⅲ類に属する。(25・26)は、羽釜で体部が球形化する段階で河内B2型に属する。

P22は、第3層上面で検出されたピットで、須恵器小型壺(7)が出土した。(7)は、体部の大半を回転ナデ、底部近くを回転ヘラケズリ、底面に回転糸切りが認められる。口縁部から底部にかけてと内面の口縁部に自然釉が付着している。

土坑4からは須恵器杯身(18)、土坑8・須恵器杯蓋(19)、土坑13・須恵器杯身(20)土師器杯(22)、土坑9・須恵器杯蓋(21)、土坑45・須恵器杯身(23)が出土しているが、遺構の時期とは合わず混在している。



第8図 遺構内出土遺物実測図

#### 包含層内出土遺物

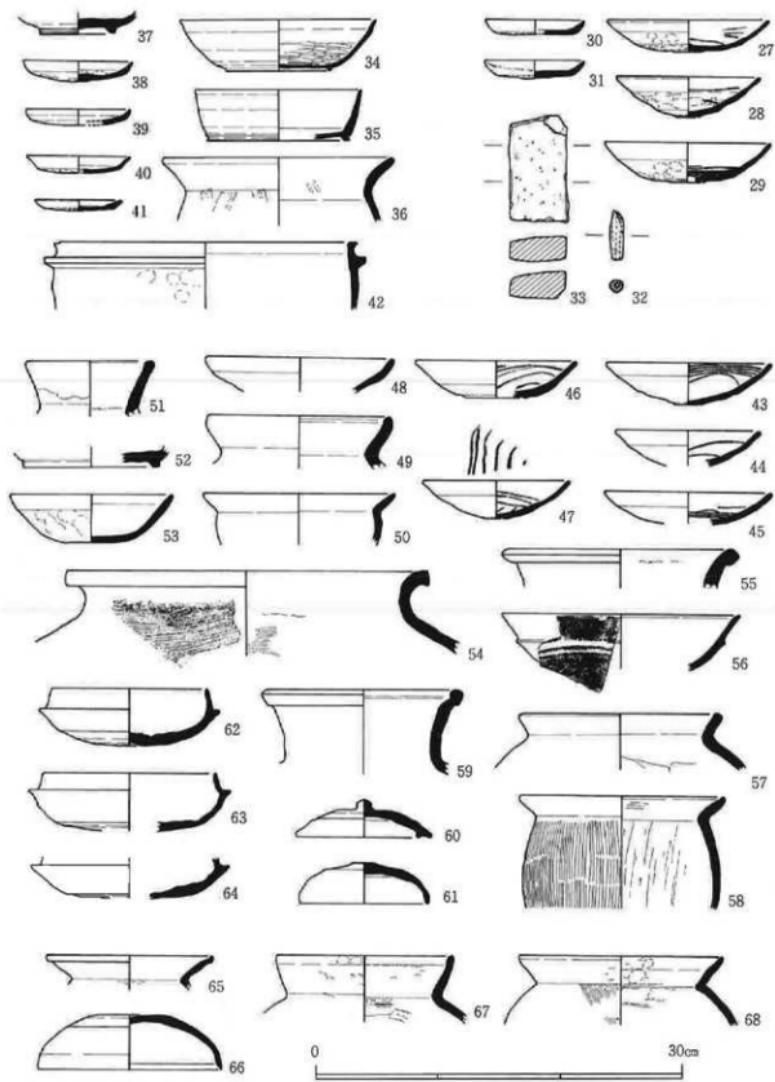
1・2層内からは瓦器椀（27～29）、土師器皿（30・31）、土錐（32）、砥石（33）が出土した。（27）の瓦器椀は、口径11.6cm、底径1.8cm、器高3.3cmを測る。和泉型Ⅲ～Ⅳ期に属する。3層内からは瓦器椀（34）、須恵器杯（35）、土師器甕（36）・皿（38～41）・椀（37）・瓦質羽釜（42）が出土している。3-A層からは瓦器椀（43～47）、土師器皿（48）・甕（49・57・58）・杯（53）、須恵器壺（50・55）・提瓶（51）・甕（54・59）・杯身（52・62～64）・杯蓋（60・61）・無蓋高杯（56）が出土している。

5層内からは土師器甕（65・67・68）、須恵器杯身（66）が出土している。（65・68）は、「く」の字状に屈曲外反する口縁部に、体部外面に細かなタタキメを残す甕で、庄内から古墳時代初頭に属する。（67）は、口縁端部を内側に肥厚している。

#### 7) まとめ

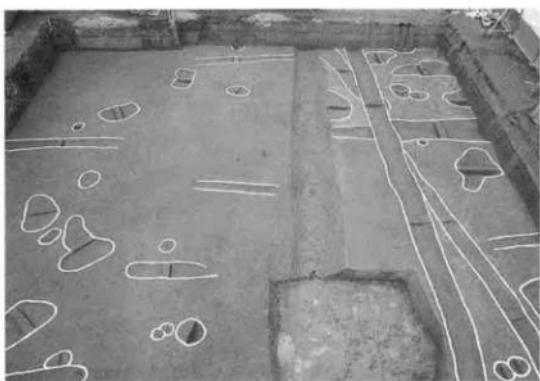
今回の調査では、I期～IV期まで中世～古墳時代にかけての集落跡が確認された。小規模な溝やビットが主要な遺構で、集落の規模や性格を確定できる資料は検出できなかった。

ただ、第4遺構面では、古墳時代の井戸状遺構や柱穴が確認されているので、住居跡であった可能性が高く、また沙層の自然微高地につくられた遺構は、丁寧な整地が施されているので、集落を営む上でかなりの造成が行なわれたことがわかる。遺構の密集度から考えられれば、集落の中心はさらに北東のほうへ広がる可能性が高いと思われる。



第9図 包含層内出土遺物実測図

図版1 意岐部遺跡 遺構

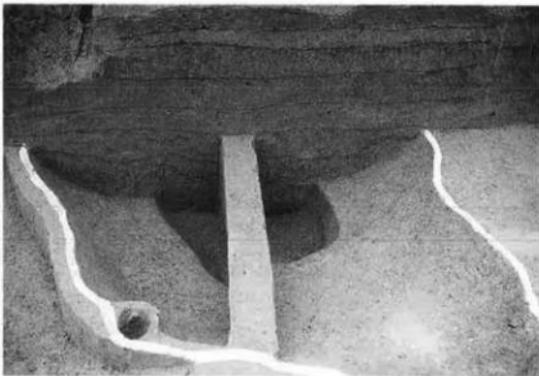


図版2 意岐部遺跡 遺構

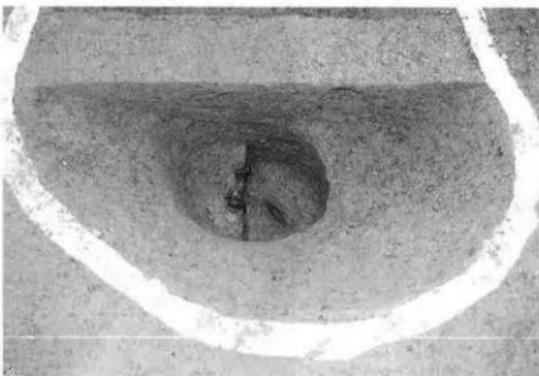
1. 土坑30内の状況



2. 土坑45全景



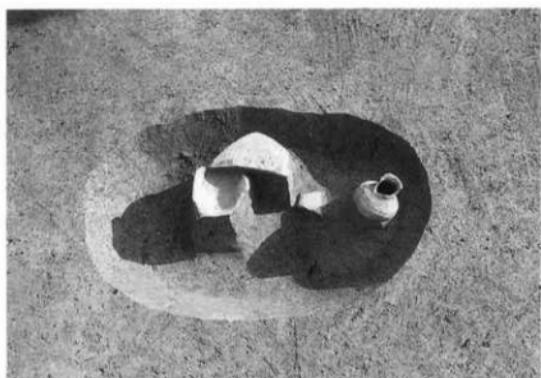
3. P41内の状況



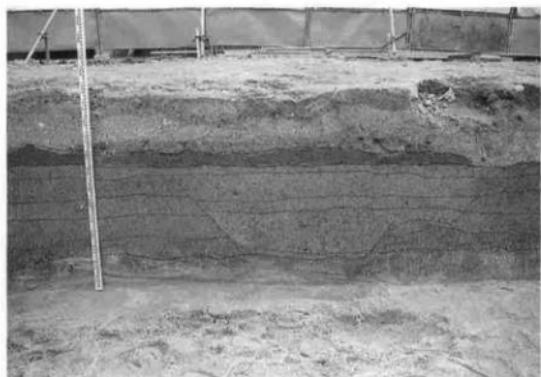
圖版3 意岐部遺跡 遺構



1. C地區土坑2內土器出土狀況



2. C地區P22內土器出土狀況

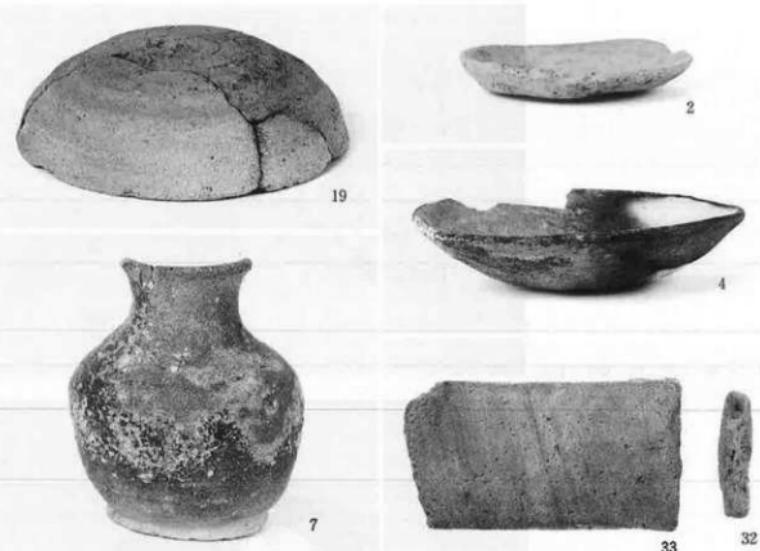


3. C地區南壁斷面

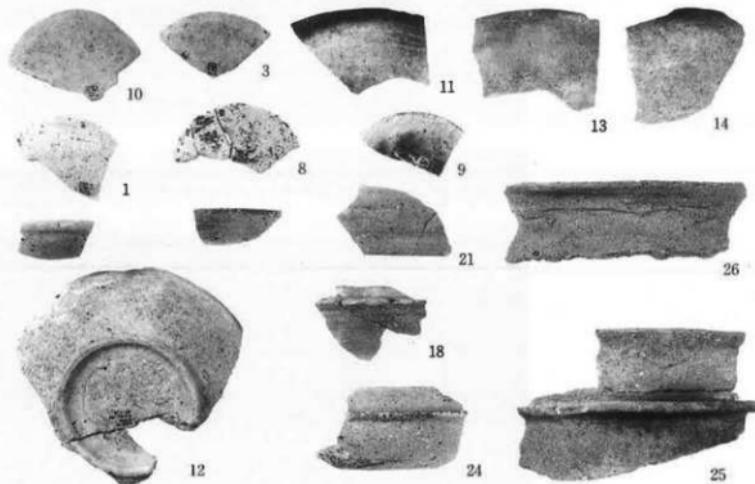
図版4

意岐部遺跡

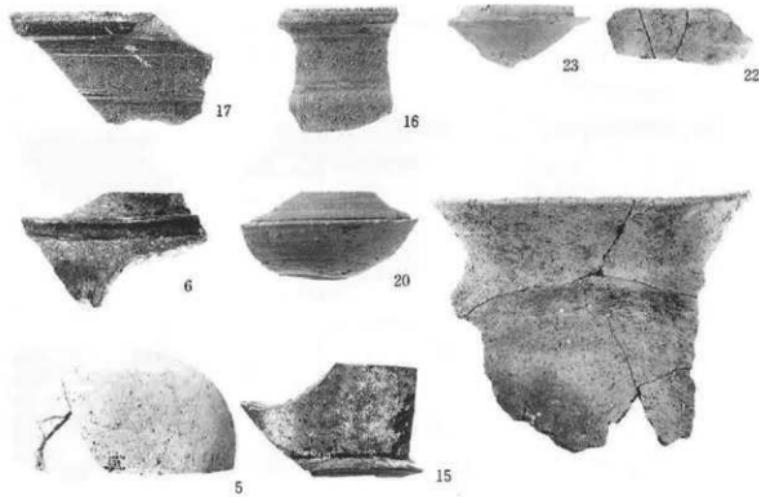
遺物



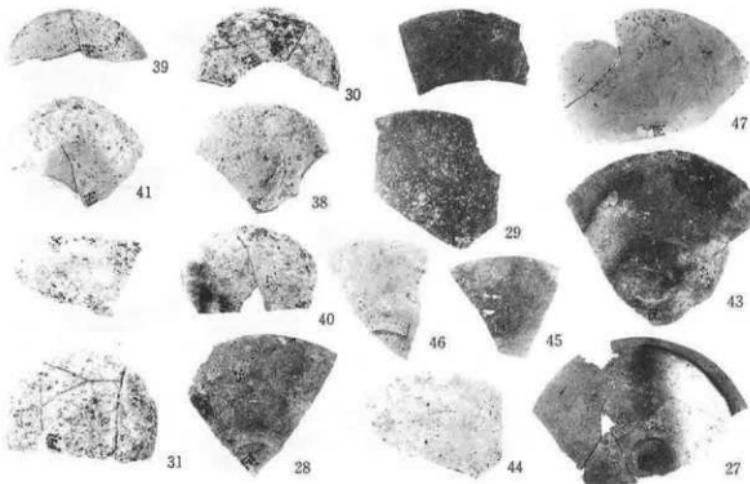
土坑2出土(2・4)、土坑8出土(19)、ピット22出土(7)、第1層出土(32)、第2層出土(33)



土坑2出土(1・3)、土坑4出土(18)、土坑9出土(21)、ピット6出土(11~14・25・26)、ピット14  
出土(8~10)、ピット22出土(24)



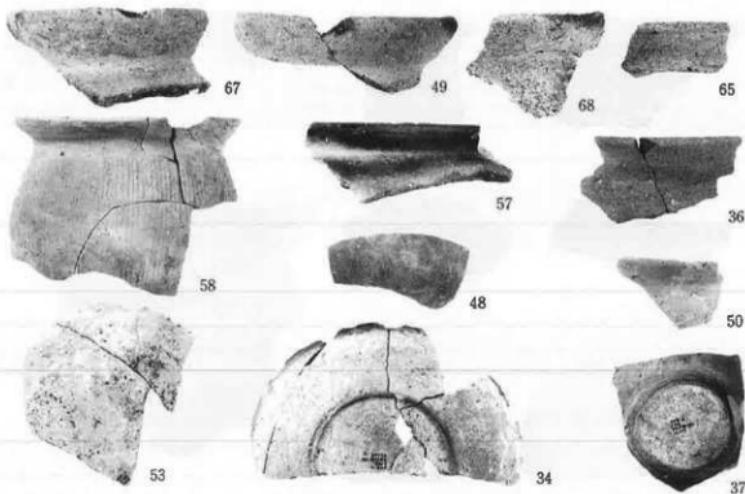
土坑1出土(15~17)、土坑2出土(5・6)、土坑13出土(20・22)、土坑45(23)



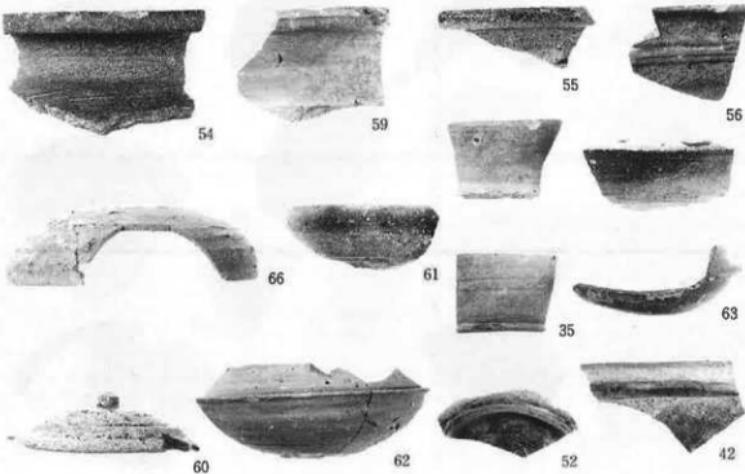
第2層出土(27~31)、第3層出土(38~41)、第3-A層出土(43~47)

圖版6

意岐部遺跡  
遺物



第3層出土(34・36~37)、第3-A層出土(48~50・53・57・58)、包含層出土(65~68)



第3層出土(35・42)、第3-A層出土(52・54~56・59~63)、包含層出土(66)

## 第7章 西ノ辻遺跡第41次発掘調査

### 1) はじめに

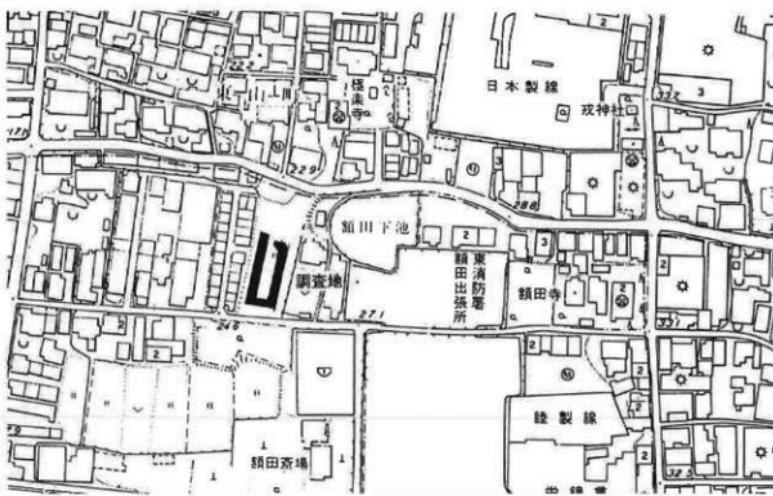
今回、発掘調査を実施した東大阪市南莊町507番地内は、西ノ辻遺跡の東端で額田寺跡に隣接し、標高0.P. +約23.5mの段丘上にあり、旧字名では「寺の西」内の一端に位置する。平成11年4月、額田見作氏から当該地における賃貸の共同住宅建設の届出があり、9月に試掘調査を実施したところピットおよび土師器小片を検出した。そのため代理者を通じて協議を行ない、とくに建物柱列を対象として発掘調査を実施することになった。

西ノ辻遺跡は、弥生時代中期から室町時代に亘る複合遺跡であるが、とくに弥生時代の遺跡として周知されている。これまで、当遺跡の西・北部での調査が多く（近鉄東大阪線・第2阪奈有料道路建設に伴うなど）、42次の発掘調査が行なわれている。弥生時代は中期の方形周溝墓・大溝・柱穴群などの遺構、多量の中・後期の土器や石器などの遺物がみつかっており、大きな集落が營まれていたと思われる。古墳時代は須恵器などの遺物・流路内から石組貯水施設が検出され、奈良時代も流路内から海獸葡萄鏡やミニチュアのカマドセッタなどが出土しているが、この期間の明確な状況はわかつていない。平安時代以降室町時代にかけては柱穴群・井戸・土坑墓などの遺構、土師器・瓦器などの遺物が検出されており、整地して集落が營まれ続けていた。東に接する額田寺跡は、鎌倉時代から室町時代に亘る瓦・土器などが見つかっているが、この時期の寺の規模などはわかつっていない。

建設予定の建物は南北方向に長く、その両長辺外側柱列部に約2.2m幅の2トレンチ（西・東トレチ）と南側で両トレチを繋いだ幅1.5mのトレチ（南トレチ）を設定して調査を開始した。ただ調査途中に、東トレチ北端部で土坑の一端を検出したことから、一部西・北側に拡張した。調査は平成11年11月2日から11月25日まで実施した。



第1図 遺跡周辺図 (1/15000)



第2図 調査地点位置図(1/2500)

## 2) 遺構と遺物

### 第1遺構(第3図 図版1)

西および南トレンチ角付近において、第5層および溝7上面で土坑1基(土坑1)と溝3条(溝1~3)を検出した。

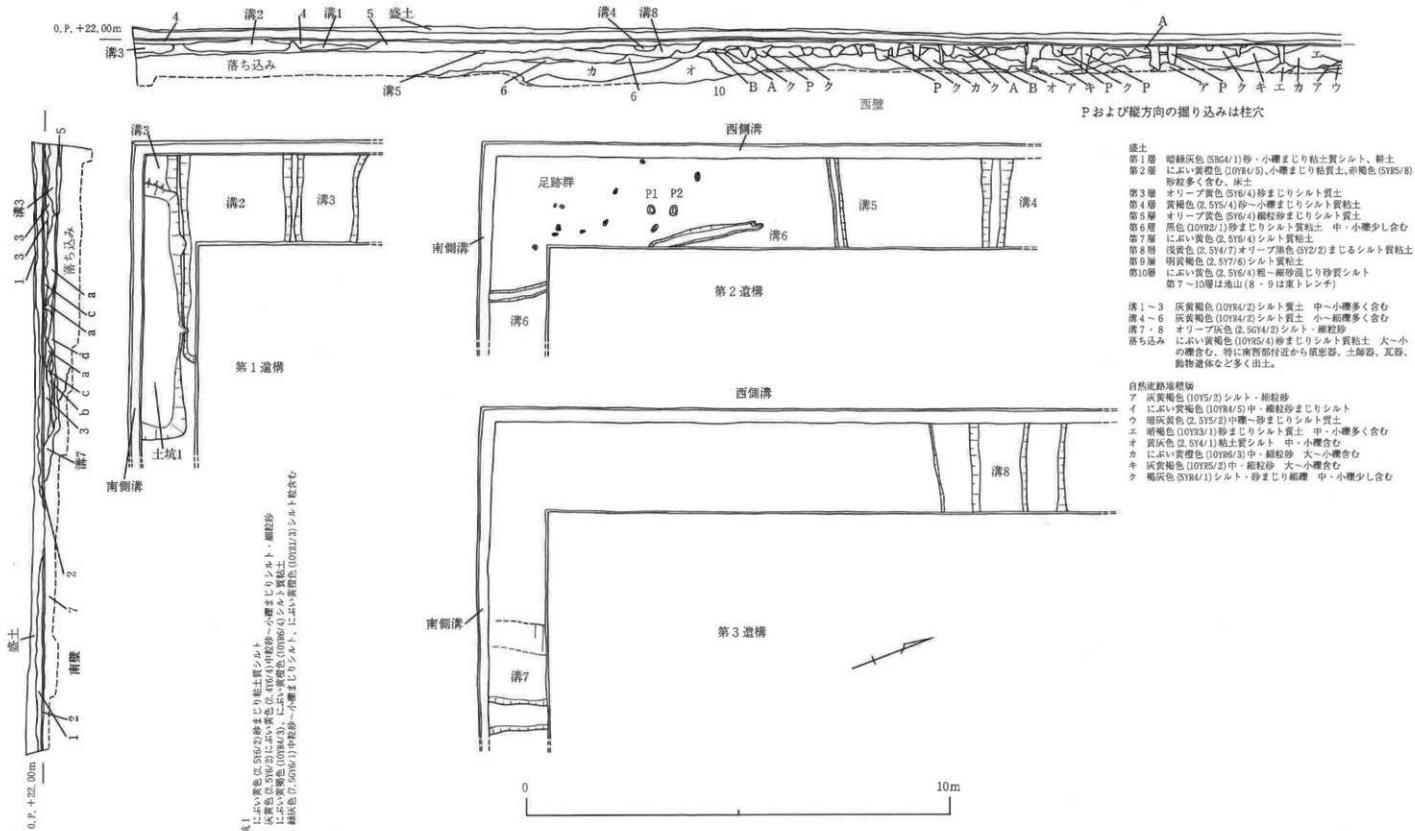
土坑1は南トレンチ南壁に沿って北側と東西の一部を検出。検出の東西幅5.4m、南北幅0.96m、深さ0.26mを測り、断面は扁平な逆台形状を呈したと思われる。土坑内は4層に分かれ、下部の緑灰色細粒砂まじりシルト(d)、にぶい黄褐色・にぶい黄橙色シルト質粘土(c)、灰黄色・にぶい黄色中粒砂~小礫まじりシルト・細粒砂(b)、にぶい黄色砂まじり粘土質シルト(a)であり、オリーブ黄色砂まじりシルト質粘土(第3層)で完全に埋没した。土師器・磁器小片が出土した。時期は江戸時代後半ごろ。

3条の溝は東西方向に平行に走り、断面は幅広の浅いU字形を呈し、溝上部は黄褐色砂小礫まじりシルト質粘土(第4層)、下部は中・小礫を多く含む灰黄褐色シルト質土であった。溝1は幅1.25~1.7m、深さ0.21m、溝2は幅2.2~2.35m、深さ0.25mを測った。溝3は大半が調査地外および土坑1による破損で正確な規模など不明。溝2内からは土師器・磁器小片が出土した。時期は江戸時代前半ごろ。

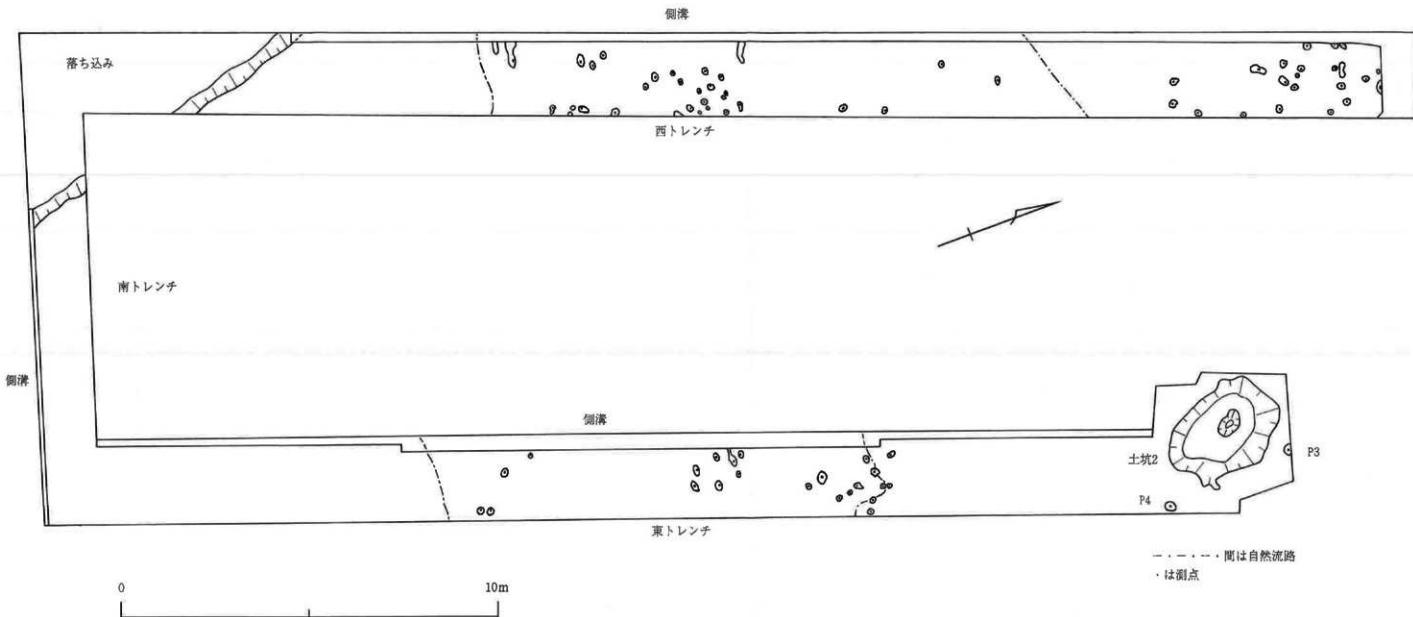
### 第2遺構(第3図 図版1)

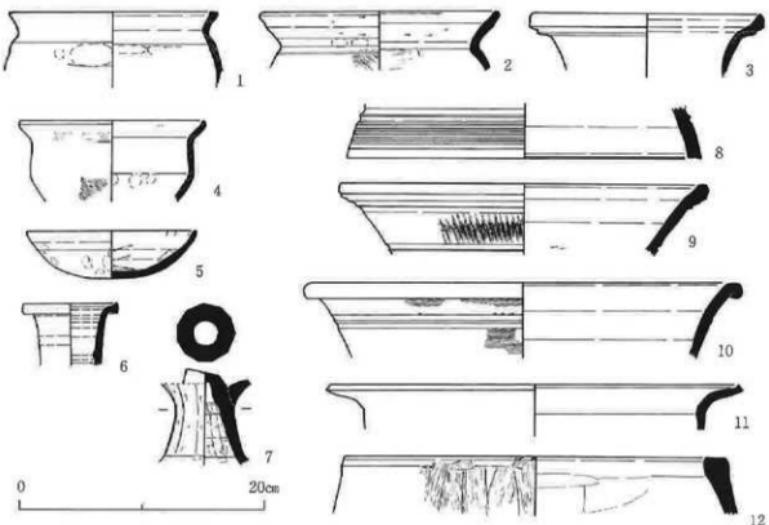
西および南トレンチ角付近において、落ち込みおよび溝8上面で3条の溝および(溝4~6)2ピット(P1・2)と足跡群を検出した。

溝4は溝8上面で検出し、東南東から西北西方向に延びて断面浅い丸底形を呈する。検出の長1.9m、幅0.45~0.56m、深さ0.05mを測る。溝5・6は落ち込み上面で検出した。溝5は東南東から西北西に延び断面U字形を呈し、検出の長さ1.85m、幅0.21~0.24m、深さ0.05mを測る。溝6は北北東から南南西に延び、断面浅いU字検出の長さ5.9m(一部調査地外)、幅0.1~0.28m、深さ0.06mを



第3図 第1・2・3造構平面および南壁・西壁(部分)断面図





第5図 出土遺物実測図

測る。溝内は小・細縫を含む灰黄褐色シルト質土で、溝4から土師器皿細片、溝6から須恵器・土師器の各小・細片が出土した。

P1・P2はともに径約0.15~0.2m、深さ0.03mの不定の円形で、断面浅い鉢状を呈した。足跡群は、人・10および有蹄動物と思われるもの2を検出した。いずれも踏み込みが浅く、歩行状況などは不明である。第2遺構は室町時代後半ごろ。

#### 第3遺構(第3図 図版1)

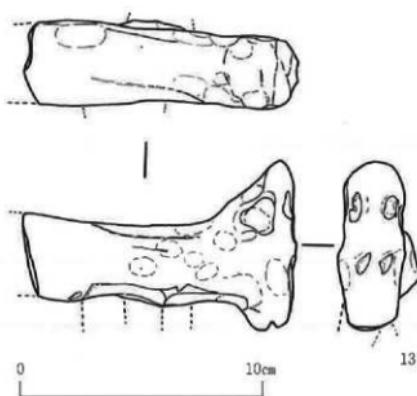
西および南トレントにおいて、第7層(地山)・落ち込み・第A層(整地層)で2条の溝(溝7・8)を検出した。

溝7は南トレントで検出した北から南方向に走る溝。東側は2段に落ちるが、西肩の南側は土坑1によって破壊していた。幅2.5m、深さ0.7mを測り、溝内はオリーブ灰色細粒砂まじりシルトで、土師器皿小片が出土した。溝8は西トレントで検出した東から西に走る溝。断面逆凸状を呈し、幅2.6~2.8m、深さ0.38mを測る。溝内はオリーブ灰色細粒砂まじりシルトで、土師器小片が出土した。溝7と8とは連結状態は不明であるが、一連の遺構と考えられる。時期は室町時代中ごろ。

#### 第4遺構(第4図 図版2・3)

西および南トレント角において第7層(地山)および自然流路上面で落ち込み1基、西トレントおよび東トレントにおいて第A層または第B層(整地層)と自然流路・第6層上面で多数のピット群、東トレント北端においては第6層(地山)上面で土坑1基(土坑2)と2ピットを検出した。

落ち込みは大半が調査地外になるため本米の規模・形状は不明。検出の南北最大幅10.3m、東西最大幅5.35m、深さ0.6m以上(計画遺物の掘削底付近まで)を測った。落ち込み内にはにぶい黄褐色砂・礫まじりシルト質粘土で、土師器壺(2)・須恵器の壺(3)・長頸壺(6)・器台(9)・大壺(10)・坏・高坏、



第6図 土馬実測図

土師器の椀(5)・高壺(7)・羽釜(11)・甌(12)、土馬(13)、瓦器椀、瓦質土器、動物遺体(種不明)など古墳時代から中世亘る多くの遺物が出土した。性格不明。13世紀中ごろ。

ピット群は径0.15~0.4m、深さ0.15~0.35mを測り、柱穴群である。大半は東トレーニング中央・西トレーニング北~中央の地山および自然流路直上で検出したが、一部は第A層(灰オーブ色砂・小礫まじりシルト質土)または第B層(灰褐色砂・細礫まじり粘土質シルト)の各整地層上面で検出したものもあった。また、ピットの検出状態およびピット内の埋土―多くは暗灰黄色(2.5Y5/2)砂まじり粘土質シルトのものと灰褐色(7.5YR5/2)砂・細礫まじり粘土質シルトのもの―からも

2時期以上数回にわたっての建て替えがあつて考えられる。しかしへトレーニング幅も狭く建物状況は復元でき得なかった。各ピット内からはほとんど遺物は出土しなかつたが、第A層からは土師器壺(4)、須恵器器台(8)、須恵器・土師器の細片、第B層から須恵器・土師器の小・細片が出土しており、柱穴群は奈良時代から平安時代前半にかけてのものと思われる。

土坑2 東トレーニング北端で検出。平面は変形の角丸長方形を呈して西角などに突出部を有し、底部中央に梢円形の窪みがあった。長辺約3m、短辺2.3m、深さ0.6mを測り、土坑内埋土は緑黒色(5G2/1)砂~小礫まじり粘土質シルトで、炭および磨滅した土師器壺・壺細片が出土した。性格不明。土坑2の西・北部で検出したP3・4も埋土などから同時期のものと思われる。古墳時代前半。

#### 第5遺構―自然流路(第4図 図版3)

東および西トレーニングにおいて、第7~10層(地山)上面では東から西方向に流れていた自然流路を検出した。いずれも湧水が激しく流路底面まで確認することができなかつた。東トレーニングでは検出幅12.3m、深1m以上を測った。南側の傾斜はゆるやかであったが、北側は傾斜が強く、斜面に砂層が食い込んでいた所もあり、南側が漸であったと思われる。西トレーニングでは南肩が落ち込み1などにより上部の大半が削平されていたため本来の幅は不明であるが、下部で一部を確認し、検出幅18.6m以上、深さ1m以上を測った。北側はゆるやかに傾斜し、南側斜面には砂層が食い込んでおり、北側が漸になっていた。このことから自然流路は東トレーニングと西トレーニングとの間で蛇行して南北にそれぞれ増幅し、さらに西方向へ流れていたと思われる。自然流路は西トレーニング北肩付近の第2層から須恵器・土師器片が出土しており、古墳時代後期以前のものと考えられる。

#### 3)まとめ

今回の調査では、古墳時代および奈良・平安から江戸時代後半に亘る遺物と、5面の遺構―土坑・溝・落ち込み・柱穴群・自然流路などを検出した。本調査地は、周知の遺跡・額田寺跡に西隣して字名を「寺の西」といい、その東が現在の額田寺のある「寺垣内」、周囲に「寺の馬場」「寺の前」という字名が存するが、今回の調査では明確な寺院関連の遺構は確認できず、瓦などの遺物もまったく出土しなかつた。これまで当該地周辺での調査例はなく、今後、南接する鬼塚遺跡北東部での数次に亘る発掘調査の結果なども十分考慮して考察する必要があると考えられる。



第1遺構—土坑1、溝1・2・3(南より)



第2遺構—溝4・5・6、ピット、足跡群(南より)



第3遺構—溝8(西より)



第4遺構—落ち込み(南西より)



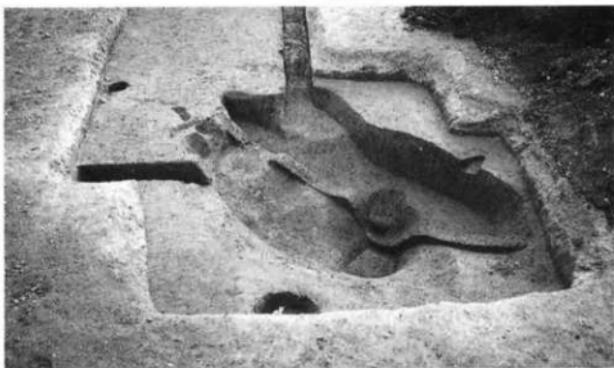
第4遺構—西トレンチ中央、ピット群(西より)



第4遺構—西トレンチ北、ピット群(西より)



第4 遺構—東トレンチ、ピット群(東より)

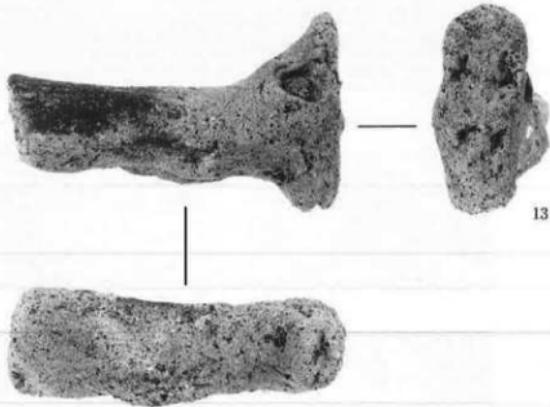


第4 遺構—土坑2(北より)

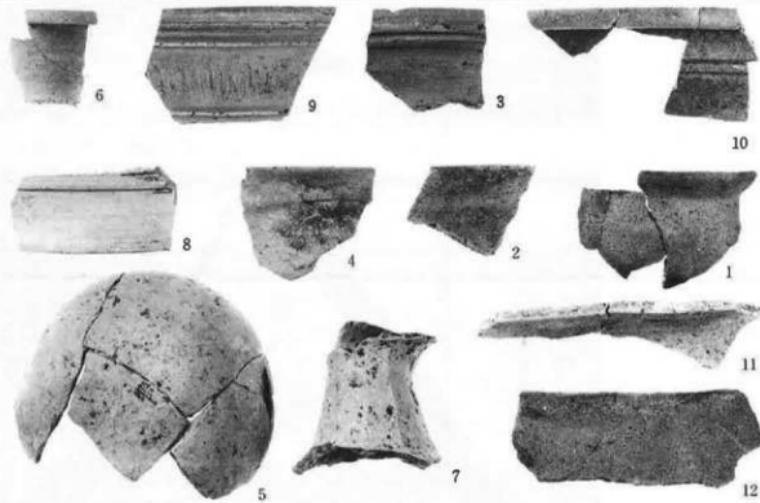


第5 遺構—東トレンチ、自然流路(南より)

図版4  
遺物



13. 落ち込み



1~3・5~7・9~12落ち込み 4・8第A層

第8章 大簸古墳第2次發掘調査

## 1) はじめに

大篆古墳は、東大阪市東石切町5丁目551番地内、標高 0.P. +約43mに位置する古墳時代後期の横穴式石室を有する周知の古墳である。本古墳は現在、山崎一郎氏邸の庭内に存している。平成11年10月に、当該古墳の石室の西および北側部に別棟の新築とその周辺部の整備計画が山崎行庸氏より代理者を通じてあり、その設計は現存する石室を保存・整備することを前提としたものであった。しかし本古墳については、後述するように石室およびその内部の発掘調査は実施され第一回第一次、詳細な報告書（以下、「報告書」とする）が刊行されているが<sup>(註)</sup>、墳丘部の報告はなく、設計と古墳全体との関係が不明確なため、墳丘の規模などを確認する必要が生じた。そのため関係者と協議を行ない、古墳の範囲確認の発掘調査を実施することになった。

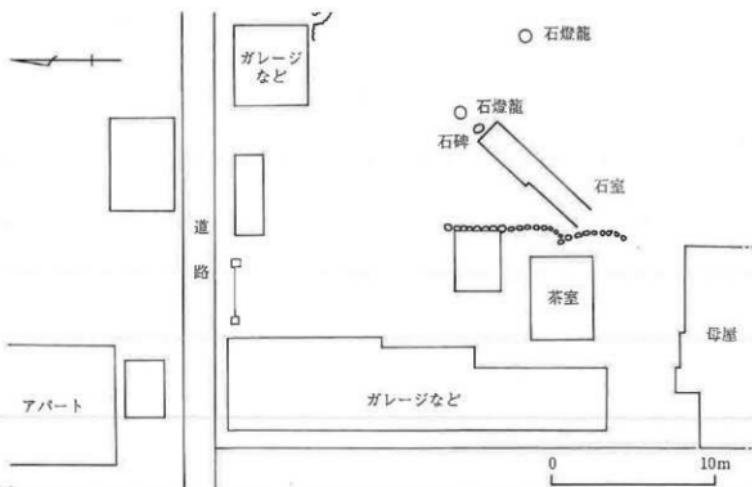
大畠古墳は昭和24年、宅地拡張工事中に石室の一部および遺物が確認されたことから、京都大学文学部考古学教室の手によって発掘調査が実施された。南西方向に開口する横穴式石室は天土石および玄室の奥壁・側壁、羨道の側壁の上部1~2段と羨道入口側はすでに破損していたが、石室内部はほとんど破壊されずに残存し、玄室奥に花崗岩板石を組み合わせた2石棺があり、玄室および羨道部から11体（男7、女4）におよぶ人骨が検出された。また、石製紡錘車、装身具（管玉・丸玉・白玉・金環）、馬具（雲珠）、鉄製品（直刀・刀子・鐵鎌・鐵釘・留金具など）、須恵器（壺・高壺・壺・台付長頸壺・提瓶・平瓶など）、土師器（壺など）が出土した。

今回の調査は、平成11年12月13日から12月28日まで行なった。調査に際しては、山崎一郎ご夫妻および藤田宜紀建築設計事務所の方々などの協力を得た。

(註)「大阪府文化財調査報告書第二輯 金山古墳および大坂古墳」昭和28年 大阪府教育委員会



第1図 遺跡周辺図(1/15000)



第2図 石室位置図

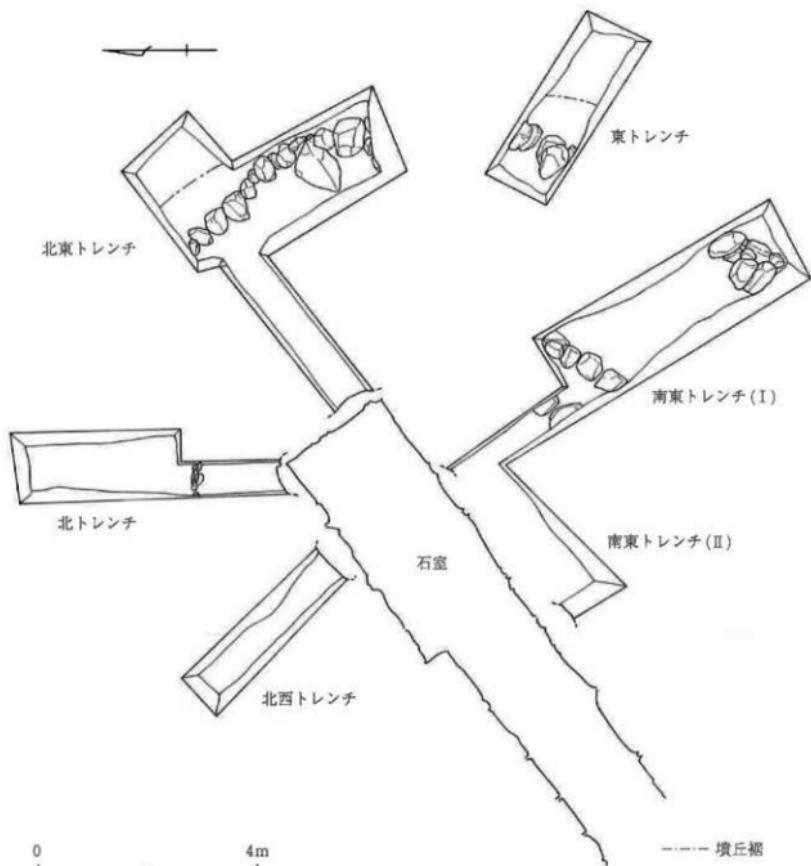
## 2) 調査の概要

古墳は丁寧に手入れされた庭内にあるため、調査トレンチは庭の樹木を極力損なわないようにその間隙をぬい、また『報告書』図版－調査時の写真＝南西方向に開口した横穴式石室の羨道部および玄室部の羨道寄りの各外側は石室発見当時までに破損しているなど（現在も当時の段差残存）－を考慮し、玄室外側に放射状に5本のトレンチ（南東・東・北東・北・北西の各トレンチ）を設定して調査を実施した。

### 南東トレンチ（第3・4図 図版1・2）

石室左側壁の奥壁よりに（羨道側は石室発見時の状況から擾乱されていることが『報告書』図版で確認されたため）南東側に幅広のトレンチを設定した=（I）。また、側壁に沿って羨道側へ墳丘の残存状態を確認するため拡張した=（II）。Iトレンチでは2列の石組列（石垣）を検出した。石室側石組列は南西－北東方向で1～2段が残存し、削平された墳丘盛土上に灰黄褐色砂まじり土で構築していた。南東側石組列は1段低く、同じくほぼ南西－北東方向の石組列で2段が残存していた。この石組列も灰黄褐色砂まじり土で構築されており（裏込め土も含め）、この土内は中・小砾を含み、須恵器・瓦器碗小片が出土した。このことからこれらの石組列は13世紀以降の棚田（畑）に伴い構築されたものと考えられる。また、両石組列間は、後世に大きく擾乱されており（第2層=にぶい黄橙色砂まじり土）、大～小砾とともに須恵器壊蓋（1）、製塙土器、瓦器碗、土師器皿、磁器などの小・細片が出土した。

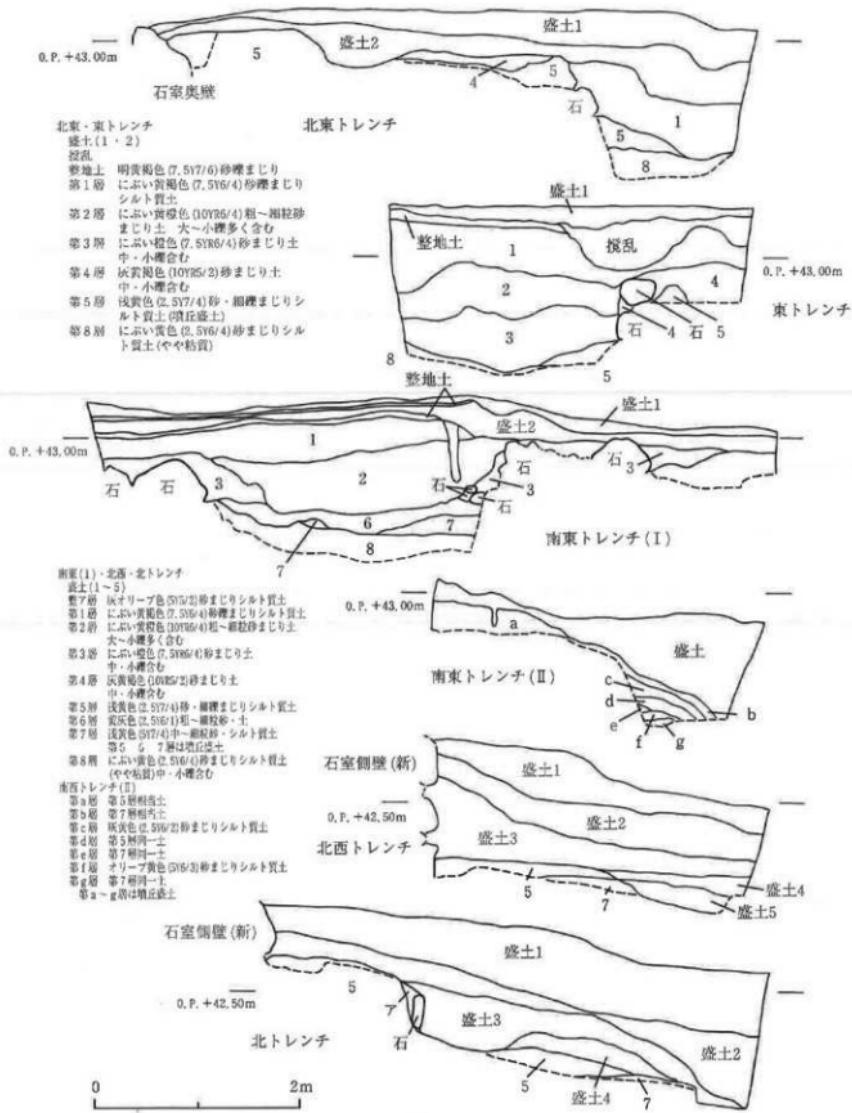
IIトレンチでは、第1次調査後の埋土を除去して墳丘の盛土の状態を確認した。墳丘の盛土は浅黄色砂・細砾まじりシルト質土=第a・d層と浅黄色中・細粒砂まじりシルト質土=第b・e・g層を主体に、その各間に灰黄色砂まじりシルト質土=第c層とオリーブ黄色砂まじりシルト質土=第f層などがあった。また、間層としてはIで黄灰色粗～細粒砂・土=第6層も確認した。盛土形成面の下層は地山ではなく、中～小砾を含むにぶい黄色の砂まじりシルト質土=第8層であった。



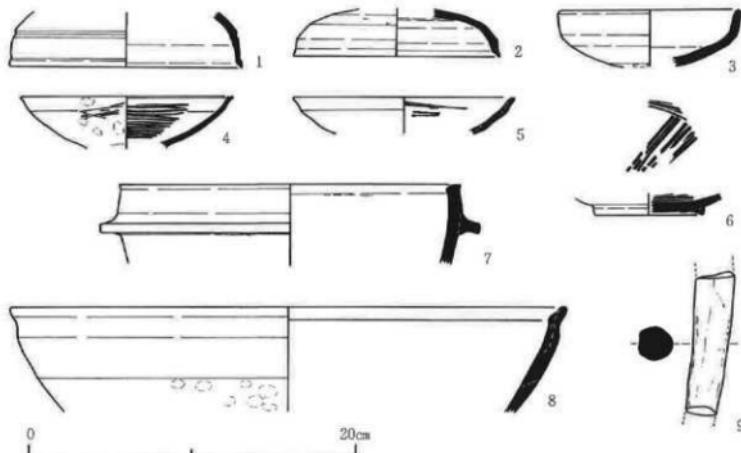
第3図 石室およびトレンチ・遺構平面図

東トレンチ(第3・4図 図版2)

石室奥壁左角のほぼ延長線上に天上石(移動されたもの)・樹木を避けて設定した。トレンチ西よりで2段に組まれた石組列を検出した。石組列は一部破損していたが、南西-北東方向に2段積まれ、灰黄褐色砂まじり土=第4層で構築されていた。また、石組列の東で墳丘の裾部と思われる、浅黄色砂・細礫まじりシルト質土=第5層を確認した。裾部はさらに少し下がり、下層のぶい黄色砂まじりシルト質土=第8層はトレンチ東端に向けて逆にゆるやかに傾上し、浅い窪み状を呈していた(第4図の断面図参照)。この窪みが古墳形成時のものであるとすれば、古墳を画した濠であった可能性が考えられる。第1・2層から瓦質羽釜(7)・須恵器、瓦器椀、土師器皿、土師質甕、陶器などの破片が出土した。



第4図 各トレンチ断面図



第5図 出土土器実測図

北東トレンチ(第3・4図 図版3)

石室の奥壁に直行するかたちで北東方向に細長い凸形に設定し、石組列の検出に伴い、南東方向に拡張した。第1層=にぶい黄褐色砂礫まじりシルト質土は近世の土で、須恵器壺蓋(2)・鉢(8)、土師器碗(3)、瓦器碗(4)、瓦質三足羽釜(9)、黒色土器碗、土師器皿、土師質羽釜、石鍋と磁器の破片などが出土した。トレンチ北東側で南東→北西方向にやや弓なり状に外弯する1~2段に積まれた石組列を検出した。石組列は、削平された墳丘土(浅黄色砂・細礫まじりシルト質土=第5層)上に配されて、灰黄褐色砂礫まじり土=第4層を用いて構築されていた。第4層からはサヌカイトの剥片や瓦器碗片(5)などが出土した。また、第5層は石組列からさらに1.1~1.3m 北東側に傾斜して延びており、墳丘の裾部と考えられる。

北西トレンチ(図版4)

石室西側の一級低い場所には現在、茶室と小屋が近接して建っている。その上この段差は報告書図版を見ても、石室発見以前の棚畠のものであったことが窺え、すでに墳丘西側はかなり破壊されていることが予想された。ただ、その残存状況をも確認するため、玄室右側壁の奥壁よりの外に、側壁に直行する形でトレンチを設定した。このトレンチは7層に分層できたが、側壁最下段の石の上部付近まですべて近代から現代の盛土(盛土1~5-瓦器、土師器とともに陶磁器などの破片出土)で、墳丘の盛土の一部である浅黄色砂・細礫まじりシルト質土と浅黄色中~細粒砂・シルト質土(第5・7層)を墳丘側の下部で一部確認したのみであった。

北トレンチ(第3図 図版3)

石室の奥壁右角から北方向に設定した。墳丘の盛土である浅黄色砂・細礫まじりシルト質土と浅黄色中~細粒砂・シルト土=第5・7層は残存していたが、多くは後世に削平されていた。上部は近・現代の盛土で(盛土1~4)、瓦器碗(6)、瓦質土器、土師器、石鍋、陶磁器の破片とともにガラス片(盛土4)も含まれていた。また、墳丘盛土を切って構築された石組列を検出したが、裏込め土内か

ら陶器片が出土しており、近世以降ものである。とくにトレンチ北側では墳丘の盛土もなく、近・現代以降に大半が破壊されてしまっていた。

### 3)まとめ

今回、南西方向に開口している右片袖の横穴式石室の玄室の周囲に、5本のトレンチを設定して発掘調査を実施した。調査の結果、石室内の残存状態(第1次調査)とは異なり、墳丘の残存状態はあまり良くないことが判明した。以下、第2次調査で知り得たことを記しておく。

1. 平野側の2トレンチ(北西・北トレンチ)は10・13世紀以降の開墾などに伴う削平により墳丘はほとんど破壊され、山側の3トレンチ(南東・東・北東トレンチ)についても墳丘は同様に破損し埋没してしまっていた。古墳は10世紀代に一部破損されたと思われるが、壊滅的な破壊・削平は13世紀代以降の中世から近代の棚田・畑形成に伴うものであったと考えられる。
2. 南東・東・北東の各トレンチにおいて1~2段に積まれた石組列(石垣)を確認した。東南および東トレンチで検出した石垣がほぼ直線になるなど墳形に沿った状態でないこと、石垣構築に伴う埋土内から瓦器片が出土したことなど、古墳との整合性は認め難く、古墳に伴う施設=外濠列石=とは思われない。これらの石垣は13世紀ごろに墳丘・石室上部を削平・破壊し、古墳と周囲との傾斜差を調整し耕作地(棚田・畑)を確保するために設けられたものと考えられる。
3. 東および北東トレンチで墳丘の裾部を確認した。このことから本古墳は径約16mの円墳であったと考えられる。また、東トレンチでは墳丘裾部と山側との間に崖みがみられ、墳丘の東に浅い濠があったと思われる。このことから、本古墳は周濠をめぐらしていた可能性を示唆している。
4. 横穴式石室は第1次調査で玄室長3.85m・幅1.8m、羨道幅1.4mとし、羨道長については発見当時の詰石(閉塞石)?状態から4.5mとされているが(『報告書』、古墳の規模などから羨道の本来の長さは6m近くはあったと考えられる)。
5. 各トレンチで墳丘の盛土を検出したが、とくに南東トレンチ(II)では墳丘の盛土の形成状況の一端を確認した。墳丘は浅黄色の砂まじりシルト質土(第5層および第7層)を主体に、それと交互に灰黄色・オリーブ黄色・黄灰色などの各砂まじり土をサンドして形成したと考えられる。
6. 今回の調査で古墳時代の遺物(須恵器坏・土器鉢碗など)は出土したが、いずれも中・近世の土および近・現代の盛土の中からであった。本古墳の時期については、第1次調査『報告書』の石室内出土土器(一群・二群・三群・群外)および第2次調査出土土器などから、7世紀初頭までには築造され、7世紀中葉のまで追葬が行なわれていたと考えられる。
7. 横穴式石室の現状。石室は本来、玄室の奥壁3段・側壁4段、羨道側壁2段に天井石を配したものであったと思われるが、天井石(1石のみ石室東横に現存)および奥壁・各側壁の上部1~2段分は欠損している。玄室では、奥壁が左角の1石以外は発見当時まであるが、玄室の左右側壁部の3段目以上の石の多くは修復されたものであり、羨道部1段目の石も一部修復されていることが判った。また、現在の石室床は本来の床面より埋土砂利敷きして20~30cm高くなっている。



横穴式石室の現状(羨道側より)



南東トレンチ(II)墳丘の盛土(北西より)



南東トレンチ(I)北西側石組列および墳丘盛土(東南より)



南東トレンチ(I)東南側石組列(北東より)



南東トレンチ(I)南西断面(北東より)



東トレンチ石組列(東南東より)



北東トレンチ石組列(北東より)



北トレンチ(北より)

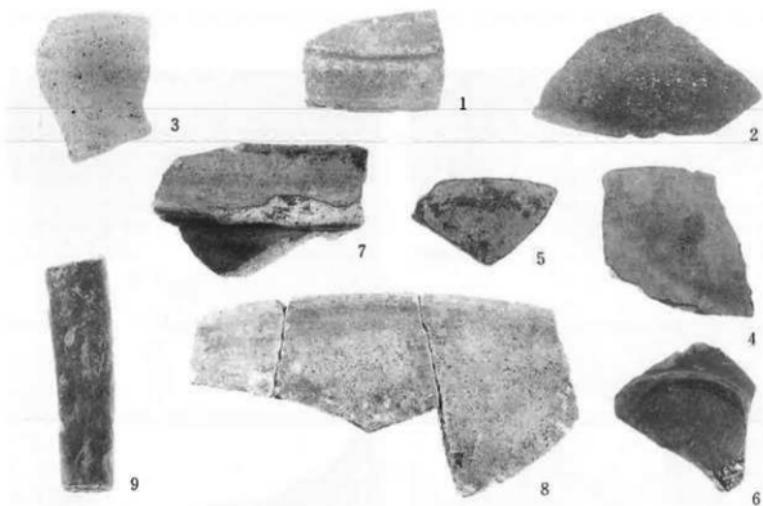


北東トレンチ石組列(南東より)

図版4 遺構・遺物



北西トレンチ南西断面一部分(北東より)



1. 南東トレンチ 2~5・8・9 北東トレンチ 6. 北トレンチ 7. 東トレンチ

報告書抄録（その1）

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう -へいせいじゅういちねんび-
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報－平成11年度－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	第1～4章 菅原章太 第5・6章 下村晴文 第7・8章 若松博恵
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4番23号
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所 取 遺 跡	ふりがな 所 在 地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ふなやま 船山遺跡	東大阪市六万寺町 3丁目	27227		19990506 ～ 19990510	33	個人専用 住宅建設
こわかえ 小若江遺跡	東大阪市小若江 3丁目	27227		19990810 ～ 19990823	82	賃貸共同 住宅建設
うりゅうどう 瓜生堂遺跡	東大阪市若江北町 1丁目	27227		19991018 ～ 19991021	46	賃貸共同 住宅貯留 槽築造
わかえ 若江遺跡	東大阪市若江南町 1丁目	27227		19990907 ～ 19990930	120	賃貸共同 住宅建設
おきべ 意岐部遺跡	東大阪市御厨東 2丁目	27227		19991025 ～ 19991209	250	賃貸共同 住宅建設
にしおつじ 西ノ辻遺跡	東大阪市南莊町 507	27227		19991102 ～ 19991125	150	賃貸共同 住宅建設
おおやぶ 大籠古墳	東大阪市東石切町 5丁目	27227		19991213 ～ 19991228	94	個人専用 住宅建設

報告書抄録（その2）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船山遺跡 (第4次調査)	集落 遺物散布地	弥生時代後期 古墳時代 歴史時代	溝・ピット	弥生土器・土師器	
小若江遺跡 (第4次調査)	集落	歴史時代	溝・ピット 土坑・落ち込み	土師器・瓦器・錢貨	
瓜生堂遺跡 (第48次調査)	集落	古墳時代 奈良時代 歴史時代	溝・落ち込み・ 土坑・ピット	土師器・須恵器・ 製塙土器	陶硯の 獣脚
若江遺跡 (第76次調査)	集落 城砦跡 寺院跡	古墳時代 奈良時代 歴史時代	井戸・自然流路・ 柱穴・溝・土坑	瓦器・土師器・須 恵器・錢貨・曲物 ・製塙土器	
意岐部遺跡 (第4次調査)	集落	古墳時代 歴史時代	溝・土坑・柱穴	須恵器・土師器・ 瓦器	
西ノ辻遺跡 (第48次調査)	集落	古墳時代 奈良～江戸時代	自然流路・土坑・ 柱穴・落ち込み・溝	土師器・須恵器・ 瓦器・陶磁器・土 馬	
大藪遺跡 (第2次調査)	古墳	古墳時代 平安～江戸時代	古墳(墳丘・石室) 石組列	須恵器・土師器・ 瓦器・陶磁器	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

－平成11年度－

発行日 2000年3月

編集・発行 東大阪市教育委員会

〒577-0443 東大阪市荒川3丁目4番23号

TEL(06)6728-9361